

よくわかる

建設業法



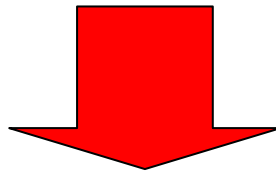
国土交通省 九州地方整備局

問 1	建設業法の目的とは	1
問 2	一般建設業と特定建設業の違いは	2
問 3	工事現場に配置する技術者とは	3
問 4	専任の監理・主任技術者が必要な工事とは	6
問 5	JV(建設工事共同企業体)工事における技術者の配置	9
問 6	監理技術者資格者証とは	11
問 7	現場代理人とは	12
問 8	元請:特定建設業者の責務とは	13
問 9	工事の丸投げ(一括下請負)とは	14
問 10	施工体制台帳とは	16
問 11	施工体系図とは	18
問 12	再下請負通知書とは	19
問 13	施工体制台帳の作成手順は	20
問 14	施工体制台帳の記載内容と添付書類は	22
問 15	施工体制台帳記載の下請負人の範囲は	23
記載例	施工体制台帳	24
記載例	再下請負通知書	26
記載例	施工体系図	28
フロー	下請契約に至るまでのフロー	30
問 16	適正な見積依頼とは	31
問 17	請負契約書はなぜ必要か	33
問 18	帳簿の記載事項と添付書類とは	34
フロー	検査・引渡・下請代金の支払いフロー<特定建設業者>	36
問 19	下請代金の適正な支払いとは	37
問 20	建設業法で定める標識の掲示とは	40
問 21	経営事項審査とは	41
問 22	建設業法に違反すると	42
問 23	建設工事紛争審査会とは	43
資料集	建設業法の概要	44
資料集	建設業法上の用語のポイント	45
資料集	駆け込みホットライン ～建設業法違反通報窓口～	46
資料集	建設工事の業種区分	48

建設業法の目的とは

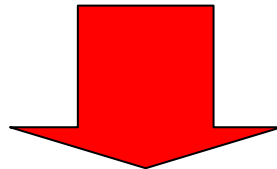
建設業法は、建設業を営む者の資質の向上、建設工事の請負契約の適正化等を図ることによって、建設工事の適正な施工を確保し、発注者を保護するとともに、建設業の健全な発達を促進し、もって公共の福祉の増進に寄与することを目的に定められたものです。（建設業法第1条）

1. 建設業を営む者の資質の向上
2. 建設工事の請負契約の適正化



建設業法の目的

1. 建設工事の適正な施工を確保
2. 発注者の保護
3. 建設業の健全な発達を促進



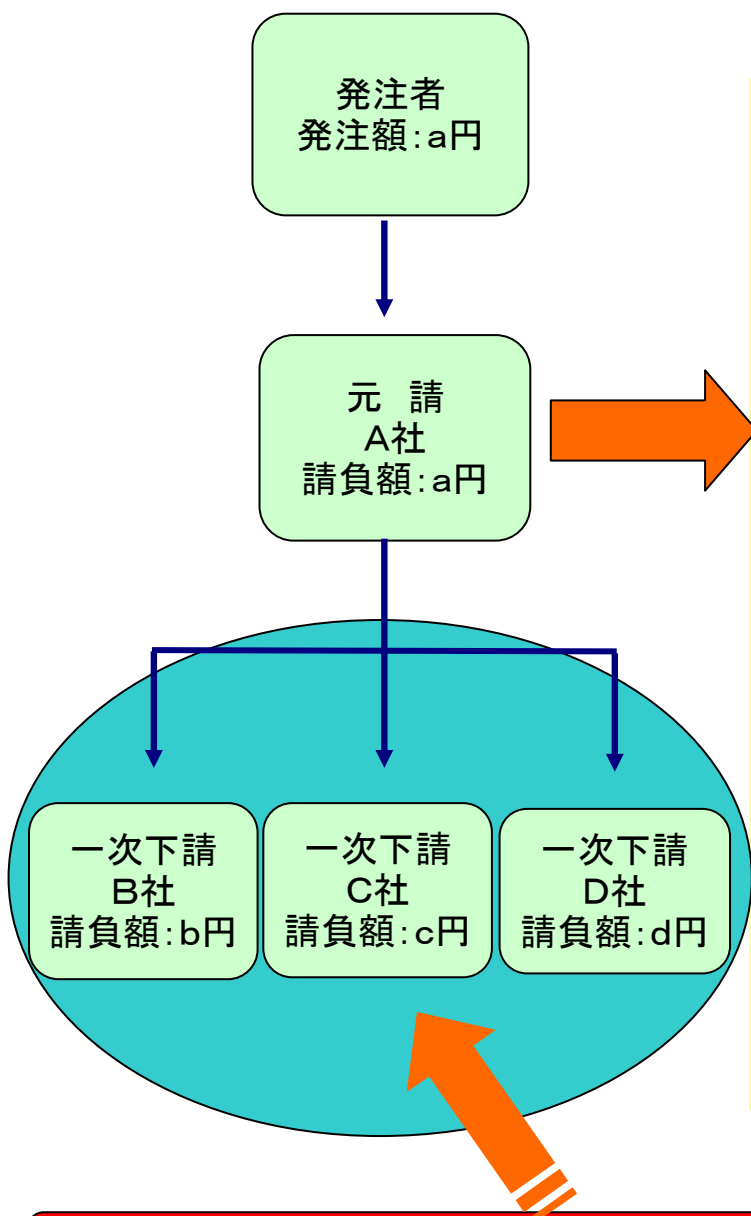
公共の福祉の増進



問 2

一般建設業と特定建設業の違いは

軽微な建設工事*のみを請け負って営業する場合を除き、建設業を営む者は、元請・下請を問わず**一般建設業**の許可を受けなければなりません。ただし、**発注者から直接工事を請け負い**、かつ**3,000万円**(建築一式工事の場合は**4,500万円**)以上を下請契約して工事を施工する者は、**特定建設業**の許可を受けなければなりません。(建設業法第3条(施行令第2条))



A社の場合、
下請発注額の合計(b円+c円+d円)が

- 3,000万円以上の場合
→ **特定建設業の許可が必要**
- 3,000万円未満の場合
→ **一般建設業の許可で可**となります。

※建築一式工事の場合は、上記の3,000万円を4,500万円と読み替えてください。

POINT

- 元請が発注者から請け負う額に制限はありません。
→ 特定建設業か一般建設業かの判断は、元請として下請に発注する額によって決まります。
- 工事の規模の大小は関係ありません。
→ 比較的規模の大きい工事を元請として受注した場合でも、その全部を元請にて自社施工するか、下請け発注額が3,000万円(建築一式工事の場合は4,500万円)未満であれば、一般建設業で大丈夫です。

特定建設業の許可は必要ありません。

POINT

- 発注者とは...

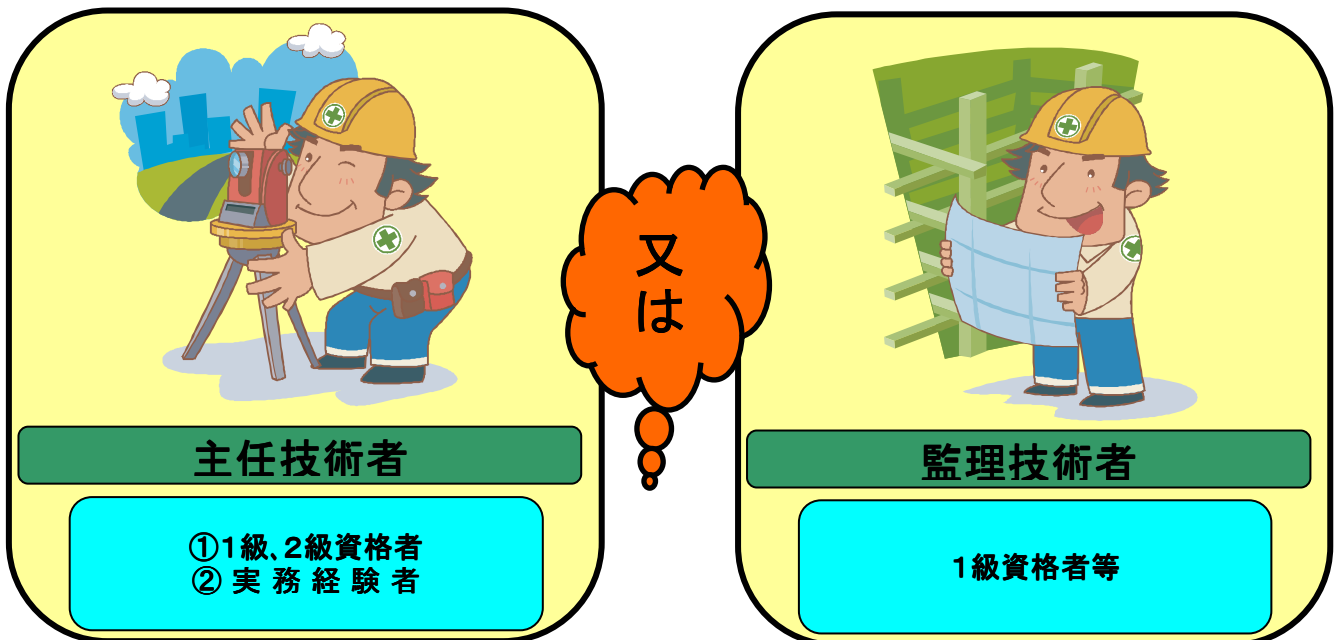
建設工事の注文者で、他の者から請け負っていない者のことです。

建設業法第2条5項...この法律において「発注者」とは、建設工事(他の者から請け負ったものを除く。)の注文者をいい、...(以下省略)

問 3

工事現場に配置する技術者とは

建設工事の適正な施工を確保するためには、実際に施工を行っている工事現場に、一定の資格・経験を有する技術者を配置し、施工状況の管理・監督をすることが必要です。



主任技術者

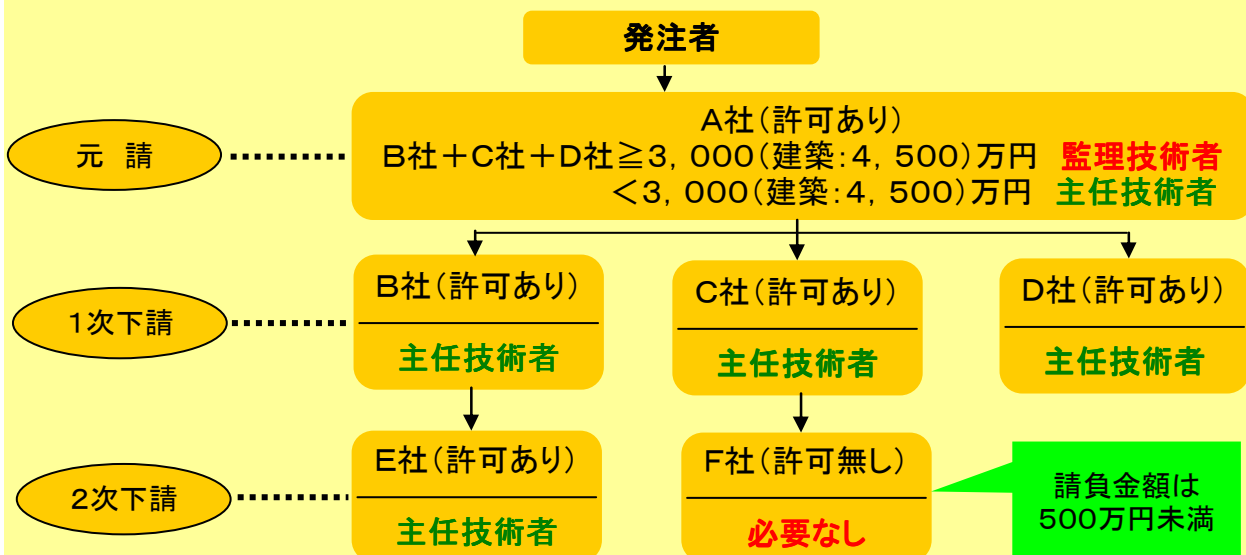
建設業者は、請け負った建設工事を施工する場合には、**請負金額の大小、元請・下請に関わらず**、必ず工事現場に施工上の管理をつかさどる**主任技術者**を置かなければなりません。(建設業法第26条第1項)

※500万円未満であっても、施工する建設工事の許可業者であれば主任技術者の配置が必要です。

監理技術者

発注者から直接工事を請け負い(元請)、そのうち**3,000万円(建築一式工事の場合は4,500万円)以上**を下請契約して施工する場合は、主任技術者にかえて**監理技術者**を置かなければなりません。(建設業法第26条第2項)

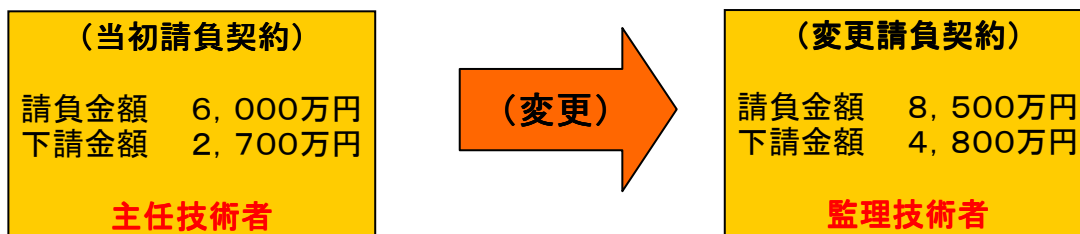
現場技術者の配置例



主任技術者から監理技術者への変更

当初は主任技術者を配置した工事で、大幅な工事内容の変更等により、工事途中で下請契約の請負代金の額が3,000万円(建築一式工事の場合は4,500万円)以上となったような場合には、発注者から直接建設工事を請け負った特定建設業者は、主任技術者に代えて、所定の資格を有する監理技術者を配置しなければなりません。

ただし、工事施工当初においてこのような変更があらかじめ予想される場合には、当初から監理技術者になり得る資格を持つ技術者を配置しなければなりません。(監理技術者制度運用マニュアル ニー二(3))



雇用関係は

主任技術者又は監理技術者については、工事を請け負った企業との直接的かつ恒常的な雇用関係が必要とされています。したがって以下のような技術者の配置は認められないことになっています。(監理技術者制度運用マニュアル ニー四(1)、(2)、(3))

- ①直接的な雇用関係を有していない場合(在籍出向者や派遣社員など)
- ②恒常的な雇用関係を有していない場合(一つの工事の期間のみの短期雇用など)



特に国、地方公共団体等が発注する建設工事において、**発注者から直接請け負う建設業者の専任の監理技術者等**については、所属建設業者から入札の申込のあった日(指名競争に付す場合であって入札の申込を伴わないものにあつては入札の執行日、随意契約による場合にあつては見積書の提出のあった日)以前に**3カ月以上の雇用関係**にあることが必要です。

恒常的な雇用関係については、監理技術者資格者証の交付年月日若しくは変更履歴又は健康保険被保険者証の交付年月日等により確認できることが必要です。(監理技術者制度運用マニュアル ニー四(3))

■雇用関係を確認するための書類

確認書類	内容	根拠	所有者	作成者	備考
健康保険被保険者証		健康保険法	技術者本人	都道府県又は健康保険組合	5人以上の事業所に使用される者は、被保険者となる
健康保険・厚生年金保険被保険者標準報酬決定通知書		健康保険法	建設業者	都道府県又は健康保険組合	事業主は使用する被保険者の標準報酬月額を都道府県又は健康保険組合に届け出る義務があり、それに対し決定額が通知される
住民税特別徴収税額のお知らせ・変更通知書		地方税法		市区町村	給与の支払いをする者は、所得税の源泉徴収義務があり、住民税の特別徴収義務者として指定される

技術者の資格一覧表

許可を受けている業種		指定建設業(7業種) 土木一式、建築一式、管、鋼構造物、ほ装、電気、造園			その他(左以外の21業種) 大工、左官、とび・土工・コンクリート、石、屋根、タイル・れんが・ブロック、鉄筋、しゅんせつ、板金、ガラス、塗装、防水、内装仕上、機械器具設置、熱絶縁、電気通信、さく井、建具、水道施設、消防施設、清掃施設				
許可の種類		特定建設業		一般建設業	特定建設業		一般建設業		
元請工事における下請金額合計		3,000万円* ¹ 以上	3,000万円* ¹ 未満	3,000万円* ¹ 以上は契約できない	3,000万円* ¹ 以上	3,000万円* ¹ 未満	3,000万円* ¹ 以上は契約できない		
工事現場の技術者制度	工事現場に置くべき技術者	監理技術者		主任技術者		監理技術者		主任技術者	
	技術者の資格要件	一級国家資格者 国土交通大臣特別認定者		一級国家資格者 二級国家資格者 実務経験者		一級国家資格者 実務経験者		一級国家資格者 二級国家資格者 実務経験者	
	技術者の現場専任	公共性のある施設若しくは工作物又は多数の者が利用する施設若しくは工作物に関する重要な建設工事* ² であって、請負金額が2,500万円* ³ 以上となる工事							
	監理技術者資格者証の必要性	必要		必要なし		必要		必要なし	

* 1: 建築一式工事の場合4,500万円

* 2: ①国又は地方公共団体が注文者である施設又は工作物に関する建設工事、②鉄道、軌道、索道、道路、橋、護岸、堤防、ダム、河川に関する工作物、砂防用工作物、飛行場、港湾施設、漁港施設、運河、上水道又は下水道、電気事業用施設、ガス事業用施設に関する建設工事、③石油パイプライン事業用施設、電気通信事業の用に供する施設、放送の用に供する施設、学校、図書館、美術館、博物館又は展示場、社会福祉事業の用に供する施設、病院又は診療所、火葬場、と畜場又は廃棄物処理施設、熱供給施設、集会場又は公会堂、市場又は百貨店、事務所、ホテル又は旅館、共同住宅、寄宿舎又は下宿、公衆浴場、興行場又はダンスホール、神社、寺院又は教会、工場、ドック又は倉庫、展望塔のいずれかに該当する建設工事（建設業法施行令第27条）

* 3: 建築一式工事の場合5,000万円

専門技術者の配置とは

土木工事業や建築工事業の業者が、土木一式工事又は建築一式工事を施工する場合（元請業者）これらの一式工事の中に他の専門工事も含まれている場合には、それぞれの専門工事について主任技術者の資格を持っている者（**専門技術者**）を工事現場に置かなければなりません。（建設業法第26条の2 第1項）

このため、土木一式工事又は建築一式工事を受注してその中で併せて専門工事も施工する建設業者は、

- ① 一式工事の主任技術者又は監理技術者が、その専門工事について、主任技術者の資格を持っている場合、その者が専門技術者を兼ねる
- ② 一式工事の主任技術者又は監理技術者とは別に、同じ会社の中で、他にその専門工事について主任技術者の資格を持っている者を専門技術者として配置する
- ③ その**専門工事について建設業の許可を受けている専門工事業者に下請けする**

のいずれかを選ばなければなりません。

また、建設業者は、許可を受けた建設業の建設工事に附帯する他の建設工事（いわゆる附帯工事）をすることができますが、その場合も、当該附帯工事に関する専門技術者を置かなければなりません。自ら施工しない場合には、当該附帯工事（軽微な工事は除く）に係る建設業の許可を受けた建設業者に当該工事を施工させなければなりません。（建設業法第26条の2 第2項）

問 4

専任の監理・主任技術者が必要な工事とは

公共性のある施設若しくは工作物又は多数の者が利用する施設若しくは工作物に関する重要な建設工事で、工事一件の請負金額が**2,500万円(建築一式工事の場合は5,000万円)**以上のものについては、工事の安全かつ適正な施工を確保するために、工事現場ごとに専任の技術者を置かなければなりません。(建設業法第26条第3項)

なお、工事現場ごとに置く専任の技術者(主任技術者又は監理技術者)の配置は下請工事であっても必要です。

◆公共性のある施設若しくは工作物又は多数の者が利用する施設若しくは工作物に関する重要な建設工事◆

請負金額**2,500万円(建築一式工事は5,000万円)**以上の
個人住宅を除くほとんどの工事 ※いわゆる民間工事も含まれます。

「工事現場ごとに専任」とは

専任とは、他の工事現場に係る職務を兼務せず、常時継続的に当該工事現場に係る職務にのみ従事していることをいいます。(監理技術者制度運用マニュアル 三)

また、「営業所の専任技術者」との兼任もできません。

- ◆営業所の専任技術者との兼任不可
- ◆他の工事現場との兼任不可



(注意)

「営業所の専任技術者」は、現場の主任技術者又は監理技術者になることができないことに注意しよう！！

「営業所の専任技術者」は、請負契約の締結にあたり技術的なサポート(工法の検討、注文者への技術的な説明、見積等)を行うことが職務ですから、所属営業所に常勤していることが原則です。

例外的に、技術者の専任性が求められない工事であって、①当該営業所で契約締結した建設工事で、②当該営業所が職務を適正に遂行できる程度近接した工事現場で、③当該営業所と常時連絡が取れる状態である場合には、兼務することができます。

(全ての要件を満たす必要があります。)

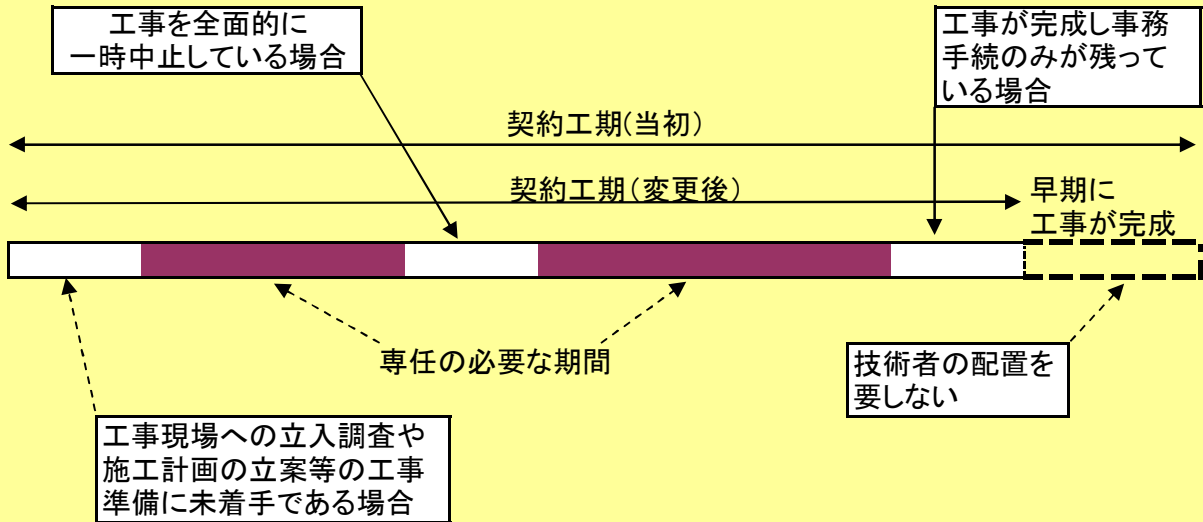
(監理技術者制度運用マニュアル ニーニ(5))

専任で設置すべき期間とは

元請工事については、基本的には契約工期が専任で設置すべき期間とされていますが、工事現場が不稼働であることが明確な期間、工場製作のみが稼働している期間は必ずしも専任を要しません。ただし、いずれの場合も、発注者と建設業者の間で設計図書もしくは打合せ記録等の書面により、専任を要さない期間が明確となっていることが必要です。

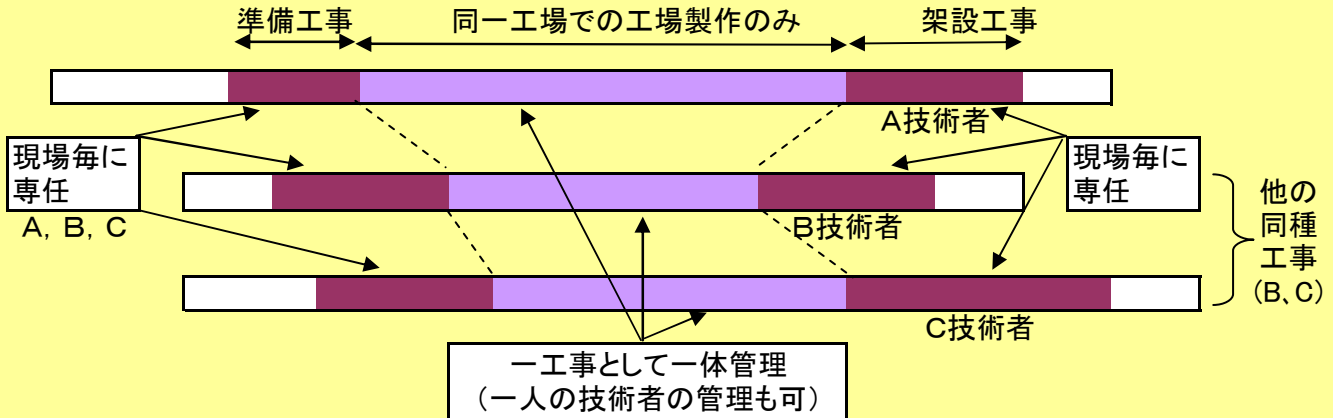
下請工事については、当該下請工事(再下請した工事があるときは、当該工事を含む。)の施工期間に技術者を専任で配置しなければなりません。(監理技術者制度運用マニュアル 三(2))

「発注者から直接建設工事を請け負った場合」の専任期間

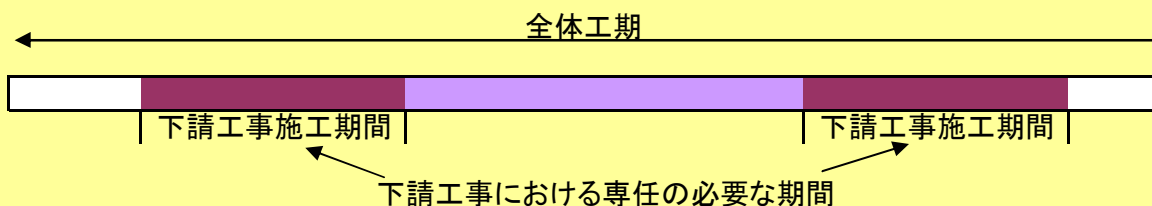


「工場製作のみが稼働している期間」に係わる専任期間

○橋梁工事等に含まれる工場製作過程など



下請工事であっても主任技術者の専任が必要



(注意)

工事が3次下請業者まで下請されている場合で、3次下請業者が作業を行っている場合は、1次、2次下請業者は、自らが直接施工する工事が無い場合であっても主任技術者は現場に専任していなければならない!

二以上の工事を同一の(主任・監理)技術者が兼任できる場合 (建設業法施行令第27条第2項・監理技術者制度運用マニュアル 三(2))

公共性のある施設もしくは工作物又は多数の者が利用する施設若しくは工作物に関する重要な工事のうち密接な関連のある二以上の工事を同一の建設業者が同一の場所または近接した場所において施工する場合は、同一の専任の主任技術者がこれらの工事を管理することができます。

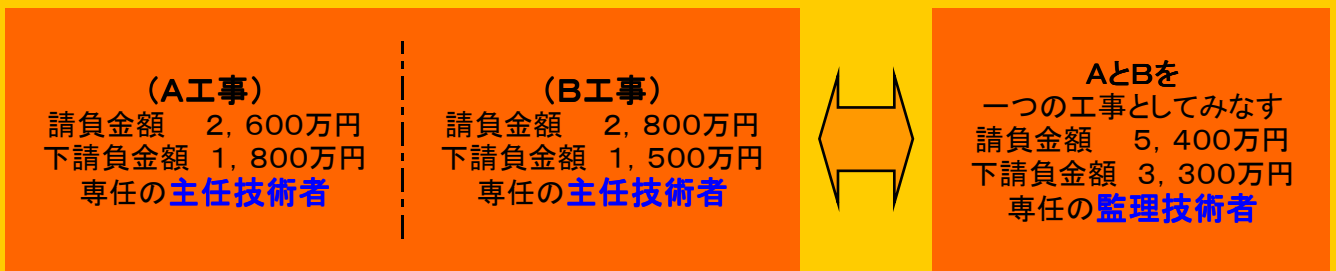
※ この規定は専任の監理技術者には適用されません。

専任の監理技術者については統合的な管理を行う性格上、二以上の工事を兼任することは認められていません。ただし、下記の要件を満たせば全体の工事を当該建設業者が設置する同一の監理技術者が掌握し、技術上の管理を行うことが合理的であると考えられることから、これら複数の工事を同一の工事とみなして、同一の監理技術者が当該複数工事全体を管理することができます。(発注者は同一又は別々のいずれでも可)

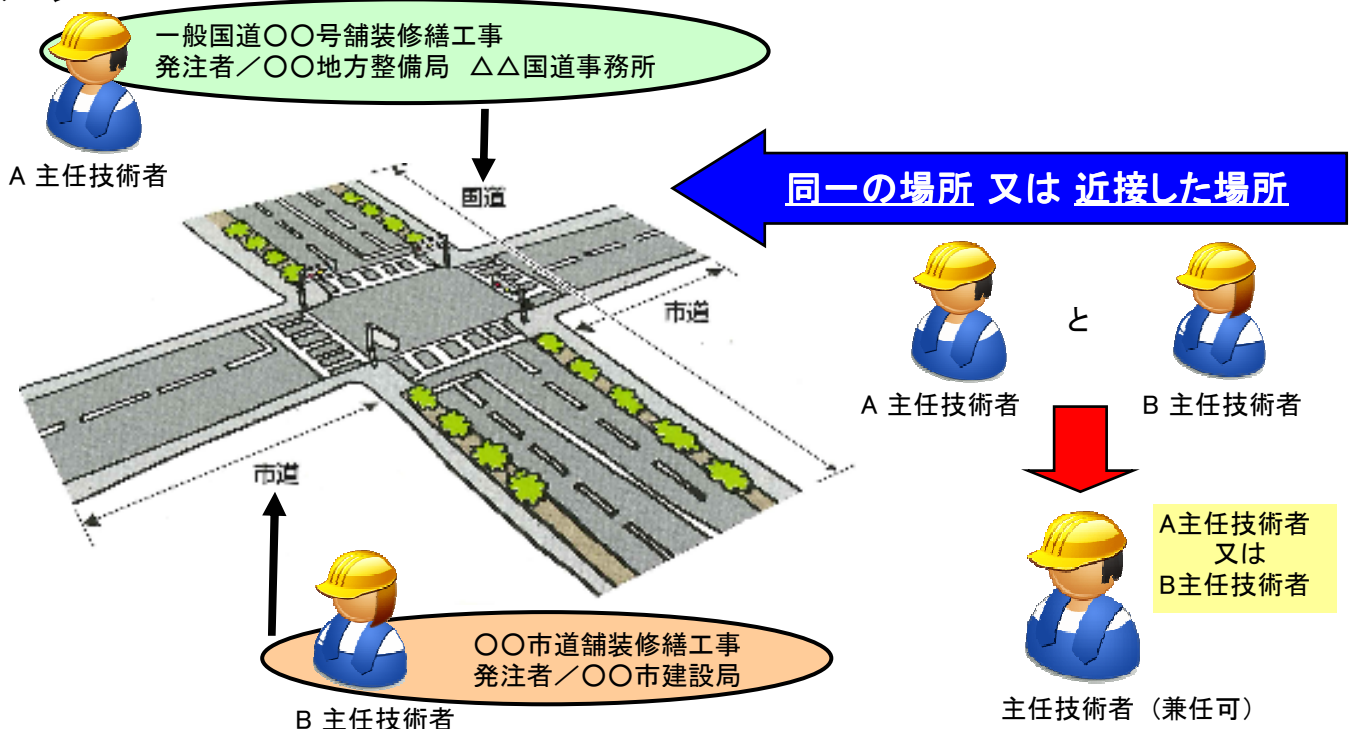
- ① 契約工期の重複する複数の請負契約に係る工事であること
- ② それぞれの工事の対象となる工作物等に一体性が認められるもの
(当初の請負契約以外の請負契約が随意契約により締結される場合に限りです。)

この場合、発注者から直接建設工事を請け負った建設業者は、これら複数工事に係る下請金額の合計が3,000万円(建築一式工事の場合は4,500万円)以上となる場合は、工事現場には主任技術者に代えて監理技術者を設置しなければなりません。

また、これら複数工事に係る請負代金の額の合計が2,500万円(建築一式の場合は5,000万円)以上となる場合、監理技術者等はこれらの工事現場に専任の者でなければなりません。



イメージ



問 5 JV(建設工事共同企業体)工事における技術者の配置

共同企業体の形態

特定共同企業体	経営共同企業体
特定の工事の施工を目的として工事毎に結成される。工事完成後又は工事を受注できなかった場合は解散する。	中小・中堅建設業者が継続的な協議関係を確保することにより、その経営力・施工力を強化する目的で結成する。
特定JVの対象となる工事は、大規模で技術的難度の高い工事としている。	発注機関の入札参加資格申請時に経営JVとして結成し、単体企業と同時に一定期間、有資格業者として登録される。

共同企業体の施工方法

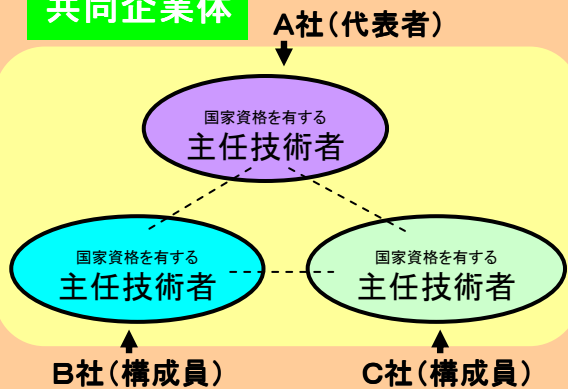
甲型共同企業体(共同施工方式)	乙型共同企業体(分担施工方式)
全構成員が各々あらかじめ定めた出資の割合に応じて、資金、人員、機械等を拠出して一体となって工事を施工する方式。	各構成員間で共同企業体の請け負った工事をあらかじめ工区に分割して、各構成員はそれぞれの分担した工事について責任を持って施工する方式。

共同企業体の施工方法

次頁へ

[甲型JVで下請代金の総額が3,000万円(建築一式:4,500万円)未満の場合]

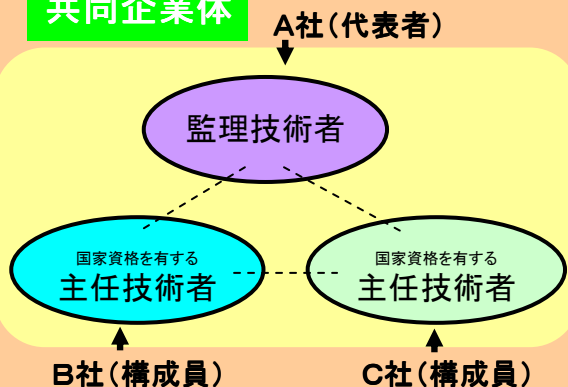
共同企業体



- ①すべての構成員が主任技術者を配置
注)共同企業体運用準則では、JV工事の主任技術者は国家資格を有する者とすべき旨が示されています。
- ②発注者からの請け負った建設工事の請負代金の額が2,500万円(建築一式:5,000万円)以上の場合は、主任技術者の全員が、当該工事に専任。

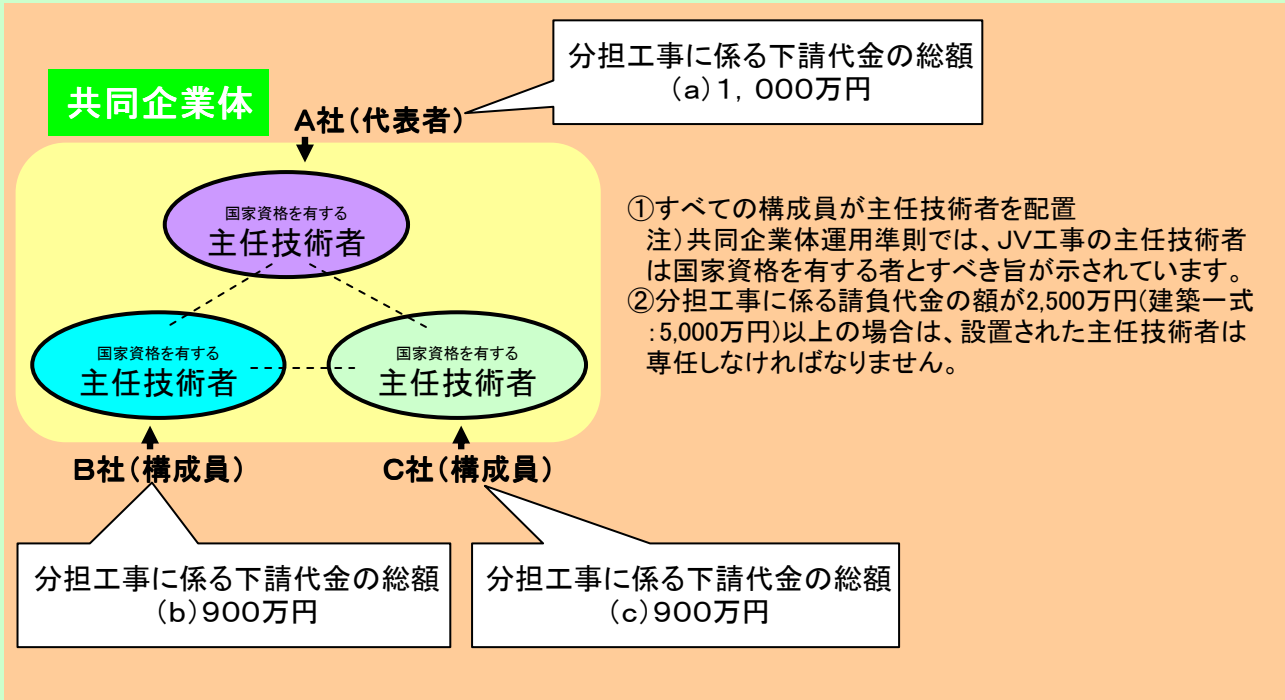
[甲型JVで下請代金の総額が3,000万円(建築一式:4,500万円)以上の場合]

共同企業体

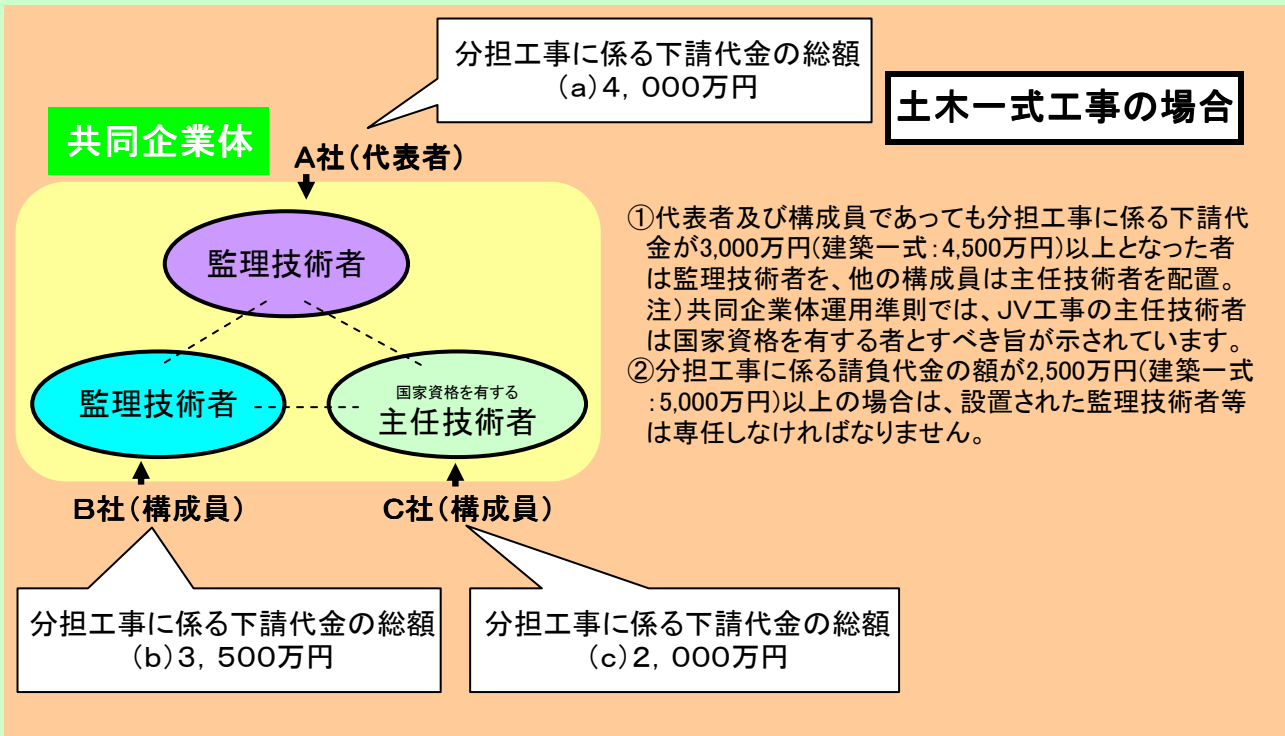


- ①構成員のうち1社(通常は代表者)が監理技術者を、他の構成員が主任技術者を配置。
注)共同企業体運用準則では、JV工事の主任技術者は国家資格を有する者とすべき旨が示されています。
- ②監理技術者及び主任技術者は当該工事に専任。

[乙型JVで分担工事に係る下請代金の総額が3,000万円(建築一式:4,500万円)未満の場合]



[乙型JVで分担工事に係る下請代金の総額が3,000万円(建築一式:4,500万円)以上の場合]



共同企業体における代表者の選定方法とその出資比率

特定共同企業体	経営共同企業体
共同企業体運用準則では、代表者は施工能力の大きいもので出資比率は構成員中最大とされています。	共同企業体運用準則では、代表者及び出資比率は構成員が自主的に決定することになっています。

問 6

監理技術者資格者証とは

元請業者が当該工事現場に専任で配置する監理技術者は、元請業者と直接的かつ恒常的な雇用関係にある者で「**監理技術者資格者証**」の交付を受けており、かつ監理技術者講習を受けている者の中から選任しなければなりません。(建設業法第26条第4項)

資格者証が必要となる工事(下表)

建設業の許可区分	技術者の専任制	下請契約金額の総額	技術者の配置	資格者証の必要性
特定建設業	公共性のある工作物に関する重要な工事で2,500万円以上(建築一式工事の場合は5,000万円以上)	3,000万円以上(建築一式工事の場合は4,500万円以上)	監理技術者	必要
		3,000万円未満(建築一式工事の場合は4,500万円未満)	主任技術者	不要

選任された監理技術者は、発注者から請求があったときは、監理技術者資格者証を提示しなければなりません。(建設業法第26条第5項)

(表裏)

(裏面)

(裏面)

(裏面)

注意事項

- 建設業法第26条第4項の規定により選任されている監理技術者は、当該選任の期間中のいずれの日においてもその日の前5年以内に行われた講習を受講していなければならない。
- 建設業法第26条第4項に規定する発注者から本証の提示を求められることがある。
- 本証は、他人に貸与し、又は譲渡してはならない。

現場代理人は、**建設業法で設置を義務付けるものではなく、契約に基づき設置されているもの**ですが、請負契約の的確な履行を確保するため、工事現場の取締りのほか、工事の施工及び契約関係事務に関する一切の事項を処理するものとして工事現場に置かれる請負人の代理人です。**公共工事においては、公共工事標準請負契約約款により現場代理人の設置が求められます。**

なお、建設業法では、請負人が請負契約の履行に関し工事現場に現場代理人を置く場合には、現場代理人の権限に関する事項及び当該現場代理人の行為についての注文者の請負人に対する意見の申し出の方法を、書面により注文者に通知しなければならないこととしています。(建設業法第19条の2)

「工事現場に常駐」とは

公共工事標準請負契約約款では、現場代理人に常駐を求めています。常駐とは、当該工事のみを担当していることだけでなく、さらに作業期間中、特別の理由がある場合を除き常に工事現場に滞在していることを意味します。

ただし、通信手段が発達した現在においては、工事期間全般について、現場代理人が工事現場に常駐しなくても、円滑な工事の遂行は可能なケースもあることから、発注者は一定の要件のもとに常駐義務を緩和できることとなりました。(平成22年7月26日改正)

一定の要件

発注者は、現場代理人の工事現場における運営、取締り及び権限の行使に支障がなく、かつ、発注者との連絡体制が確保されると認めた場合には、現場代理人について工事現場における常駐を要しないこととすることができます。(公共工事標準請負契約約款第10条3)

主任技術者、監理技術者との兼務

現場代理人、主任技術者(監理技術者)及び専門技術者は、これを兼ねても工事の施工上支障はないので、これらの兼任が可能であるとされています。(公共工事標準請負契約約款第10条4)

公共工事標準請負契約約款

建設工事標準請負契約約款とは、建設工事の請負契約を適正なものとするため、建設業法に基づき、中央建設業審議会が公正な立場から作成し、関係者に実施を勧告をしているものです。

このうち、公共工事標準請負契約約款は、公共工事はもちろんのこと、電力、ガス、鉄道等の民間工事も対象としています。

平成22年7月26日改正概要

- ◆ 約款中の呼称が「甲」「乙」から、「発注者」「受注者」に変更
- ◆ 工期延長に伴う費用増について当事者間の負担の明確化
- ◆ 公正・中立な第三者の活用が促進されるよう規定の充実
- ◆ 現場代理人の常駐義務の緩和(詳細は上記)
- ◆ 受注者が暴力団等である場合の解除権が規定

改正後の標準約款を是非ご活用下さい。



その他の約款

- ◆ 「**建設工事標準下請契約約款**」
→ 第一次下請段階における標準的な工事請負契約を念頭において作成
- ◆ 「**民間建設工事標準請負契約約款(甲)**」
→ 民間の比較的大きな工事を発注する者と建設業者との請負契約についての標準約款
- ◆ 「**民間建設工事標準請負契約約款(乙)**」
→ 個人住宅建築等の民間小規模工事の請負契約についての標準約款

問 8

元請：特定建設業者の責務とは

特定建設業者が発注者から直接建設工事を請け負い、元請となった場合には、下請業者が建設業法、建築基準法、労働基準法、労働安全衛生法などの法令に違反しないよう指導に努めなければならないとされています。(建設業法第24条の6)

なお、下請業者とは、一次下請業者だけでなく、工事に携わる全ての下請業者が対象になります。

元請：特定建設業者の責務とは



① 現場での法令遵守指導の実施



② 下請業者の法令違反については 是正指導



③ 下請業者が是正しないときの 許可行政庁への通知

【指導すべき法令の規定】

法律名	内 容
建設業法	下請負人の保護に関する規定、技術者の配置に関する規定等本法のすべての規定が対象とされているが、特に次の項目に注意すること。 (1) 建設業の許可(3条) (2) 一括下請負の禁止(22条) (3) 下請代金の支払(24条の3・5) (4) 検査及び確認(24条の4) (5) 主任技術者及び監理技術者の配置等(26条、26条の2)
建築基準法	(1) 違反建築の施工停止命令等(9条1項・10項) (2) 危害防止の技術基準等(90条)
宅地造成等規制法	(1) 設計者の資格等(9条) (2) 宅地造成工事の防災措置等(14条2項・3項・4項)
労働基準法	(1) 強制労働等の禁止(5条) (2) 中間搾取の排除(6条) (3) 賃金の支払方法(24条) (4) 労働者の最低年齢(56条) (5) 年少者、女性の坑内労働の禁止(63条、64条の2) (6) 安全衛生措置命令(96条の2第2項、96条の3第1項)
職業安定法	(1) 労働者供給事業の禁止(44条) (2) 暴行等による職業紹介の禁止(63条1号、65条8号)
労働安全衛生法	(1) 危険・健康障害の防止(98条1項)
労働者派遣法	(1) 建設労働者の派遣の禁止(4条1項)

問 9

工事の丸投げ(一括下請負)とは

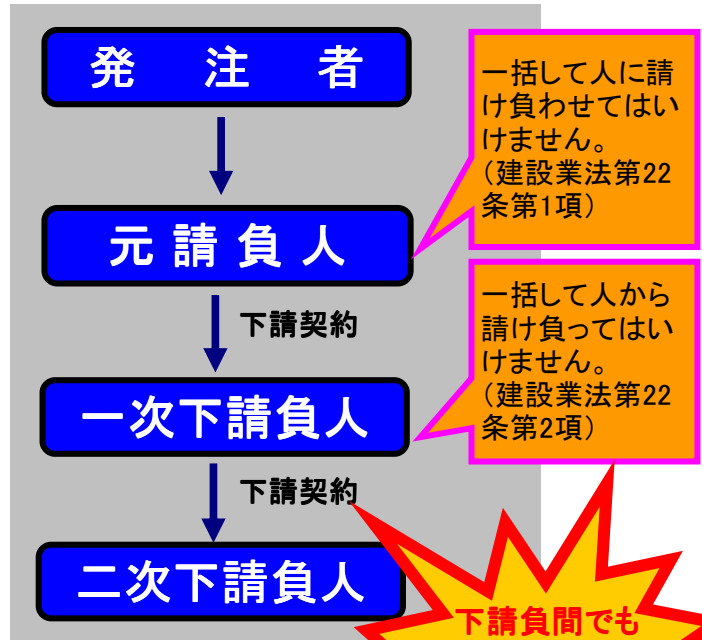
工事の丸投げとは、工事を請け負った建設業者が、施工において実質的に関与を行わず、下請負人にその工事の全部又は独立した一部を請け負わせることをいいます。

建設業法では、これを「**一括下請負**」と呼び、原則として禁止しています。(建設業法第22条)

◆一括下請負とは◆

●請け負った建設工事の全部又はその主たる部分を一括して他の業者に請け負わせる場合

●請け負った建設工事の一部分であって、他の部分から独立してその機能を発揮する工作物の工事を一括して他の業者に請け負わせる場合であって、請け負わせた側がその下請工事の施工に**実質的に関与**していると認められないものが該当します。



一括して人に請け負わせてはいけません。(建設業法第22条第1項)

一括して人から請け負ってははいけません。(建設業法第22条第2項)

下請負間でも一括下請負は禁止!

一括下請は、公共工事については**全面禁止!** 民間工事についても**原則禁止!**

●一括下請は、公共工事については、全面禁止されています。
(公共工事の入札及び契約の適正化の促進に関する法律第12条)

●民間工事は、発注者の書面による事前承諾がある場合を除き、禁止されています。(建設業法第22条第3項)
なお、平成18年の法改正により、一定の民間工事(多数の者が利用する一定の重要な施設等の工事)についても一括下請が全面禁止されることとなりました。(平成20年11月28日より施行)

下請としてきちんと仕事をしていても処分されるの?

一括下請負は、下請工事の注文者(元請負人)だけでなく**下請負人も監督処分の対象**になります。

建設業法が一括下請負を禁止している理由

- ◆ 発注者が建設業者に寄せた信頼を裏切る。
- ◆ 施工責任があいまいになることで、手抜工事や労働条件の悪化につながる。
- ◆ 中間搾取を目的に施工能力のない商業ブローカー的不良建設業者の輩出を招く。

「実質的に関与」とは、元請人が自ら総合的に企画、調整及び指導（施工計画の総合的な企画、工事全体の的確な施工を確保するための工程管理及び安全管理、工事目的物、工事仮設物、工事使用材料等の品質管理、下請負人間の施工調整、下請負人に対する技術指導、監督等）の全ての面において主体的な役割を果たしていることをいいます。

また、下請負人が再下請負する場合についても、下請負人自らが再下請負した専門工種部分に関し、総合的に企画、調整、指導を行うことをいいます。

（「一括下請負の禁止について」平成4年12月17日 建設省通知）

【下請工事への実質的な関与が認められるためには】

●自社の技術者が下請工事の

- | | |
|-----------|-------------|
| ①施工計画の作成 | ②工程管理 |
| ③出来形・品質管理 | ④完成検査 |
| ⑤安全管理 | ⑥下請業者への指導監督 |

等について、**主体的な役割**を現場で果たしていることが必要

●発注者から工事を直接請け負った者については、加えて

- | | |
|------------|-----------|
| ⑦発注者との協議 | ⑧住民への説明 |
| ⑨官公庁等への届出等 | ⑩近隣工事との調整 |

等について、**主体的な役割**を果たすことが必要

「親会社と子会社間」での下請負についても適用があります

親会社から子会社への下請工事であっても、別会社である以上、実質的関与がないと判断される場合には、一括下請負に該当します。

「一括下請負」には、重いペナルティが待っています

一括下請負は、発注者が建設業者に寄せた信頼を裏切る行為であることから、国土交通省としては、**原則として営業停止処分により厳正に対処**するとともに、一括下請負と判断された工事についてはその工事を実質的に施工していると認められないため、経営事項審査における**完成工事高から当該工事に係る金額を除外**することとしています。

問 10

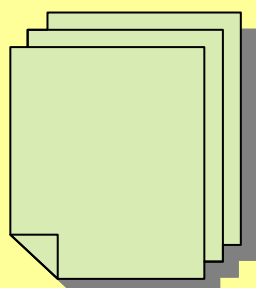
施工体制台帳とは

特定建設業者は、発注者から直接請け負った建設工事を施工するために締結した下請契約の総額が3,000万円(建築一式工事:4,500万円)以上になる場合は、施工体制台帳を作成することが義務づけられています。(建設業法第24条の7)

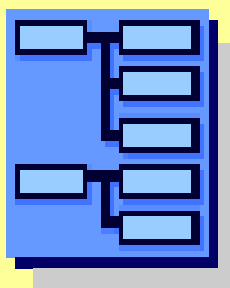
施工体制台帳は、下請、孫請など工事施工を請け負う全ての業者名、各業者の施工範囲、各業者の技術者氏名等を記載した台帳を言います。

施工体制台帳等を作成しなければならない工事

元請:特定建設業者が、
3,000万円(建築一式 4,500万円)
以上を下請に出すときに作成



施工体制台帳



施工体系図

下請契約は「建設工事の請負契約」です。
(建設工事に該当しないと考えられる資材納入、調査業務、運搬業務、警備業務などの契約金額は含みません。)

元請業者

〈 必要 〉

一次下請 (建設工事の請負金額) **2,000万円**

一次下請 (建設工事の請負金額) **1,500万円**

測量業者 (測量の委託契約) 50万円

資材業者 (資材の売買契約) 500万円

警備業者 (警備の請負金額) 100万円

運搬業者 (運搬の請負金額) 100万円

3,500万円 ≥ 3,000万円

元請業者

〈 不要 〉

一次下請 (建設工事の請負金額) **1,000万円**

一次下請 (建設工事の請負金額) **300万円**

一次下請 (建設工事の請負金額) **1,500万円**

測量業者 (測量の委託契約) 500万円

資材業者 (資材の売買契約) 100万円

警備業者 (警備の請負金額) 100万円

2,800万円 < 3,000万円

何のために施工体制台帳はつくられる？

施工体制台帳の作成を通じて元請業者に現場の施工体制を把握させることで、

①品質・工程・安全などの施工上のトラブルの発生

②不良不適格業者の参入、建設業法違反(一括下請負等)

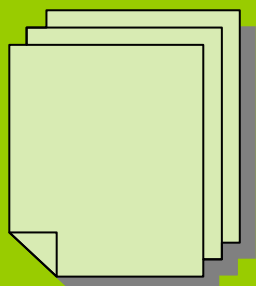
③安易な重層下請 → 生産効率低下

を防止しようというものです

施工体制台帳は、**公共工事と民間工事を問わず作成しなければなりません**。また、請け負った建設工事の目的物を発注者に引き渡すまでの期間、工事現場ごとに備え置く必要があります。(建設業法施行規則第14条の7)

さらに、入札契約適正化法の規定により、公共工事においては施工体制台帳の写しを発注者に提出しなければなりません。

[工事施工体制台帳]の提出・閲覧・保存



施工体制台帳

現場に備え置く(工事中)

5年間保存(工事完了後)



公共工事

写しの提出

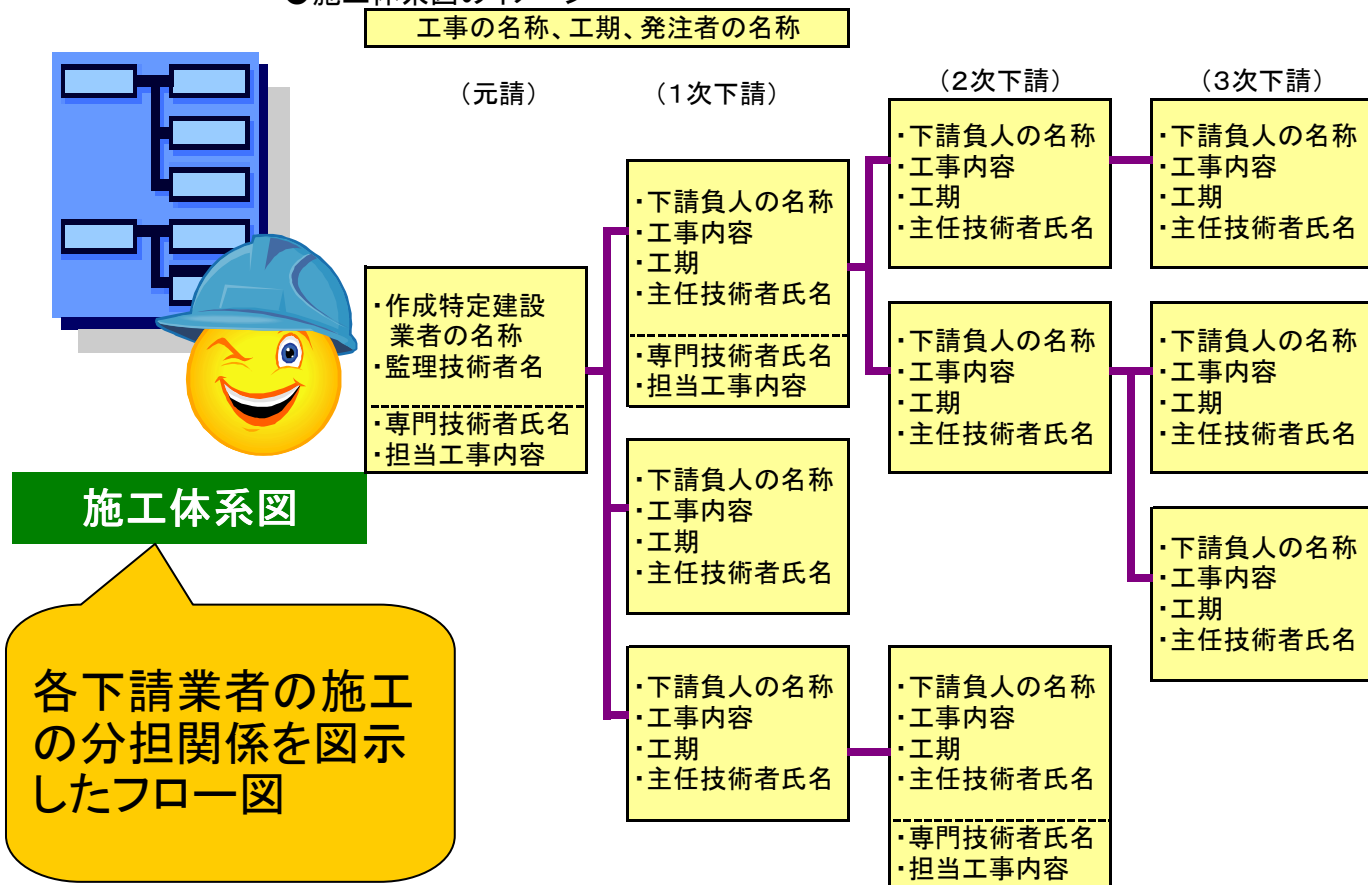
民間工事

発注者の閲覧



施工体系図は、作成された施工体制台帳に基づいて、各下請負人の施工分担関係が一目で分かるようにした図のことです。施工体系図を見ることによって、工事に携わる関係者全員が工事における施工分担関係を把握することができます。

●施工体系図のイメージ



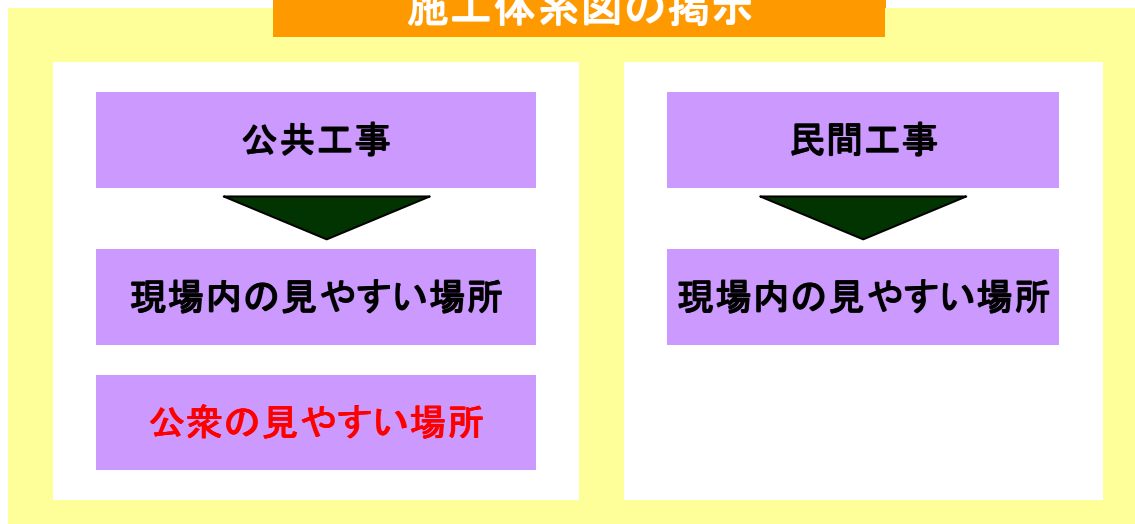
注1) 下請負人に関する表示は、現に施工中(契約書上の工期中)の者に限り行えば足りる。
(建設業法施行規則第14条の6第2号)

注2) 主任技術者の氏名は、当該下請負人が建設業者であるときに限り行う。

注3) 「専門技術者」とは、監理技術者又は主任技術者に加えて置く第26条の2の規定による技術者をいう。

施工体系図は工事の期間中、公共工事については工事現場の工事関係者が見やすい場所及び公衆の見やすい場所に、民間工事については工事関係者が見やすい場所に、掲示しなければなりません(建設業法第24条の7第4項、建設業法施行規則第14条の7)。したがって、工事の進行によって表示すべき下請業者に変更があった場合は、すみやかに施工体系図の表示の変更をしなければなりません。

施工体系図の掲示

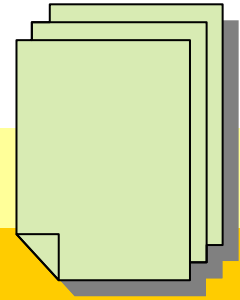


問 12

再下請負通知書とは

施工体制台帳の作成が義務づけられたことに伴い、下請負人がさらにその工事を再下請負した場合、元請である特定建設業者に対し、再下請負通知書を提出しなければなりません。(建設業法第24条の7第2項)

再下請負通知書の内容(建設業法施行規則第14条の4)



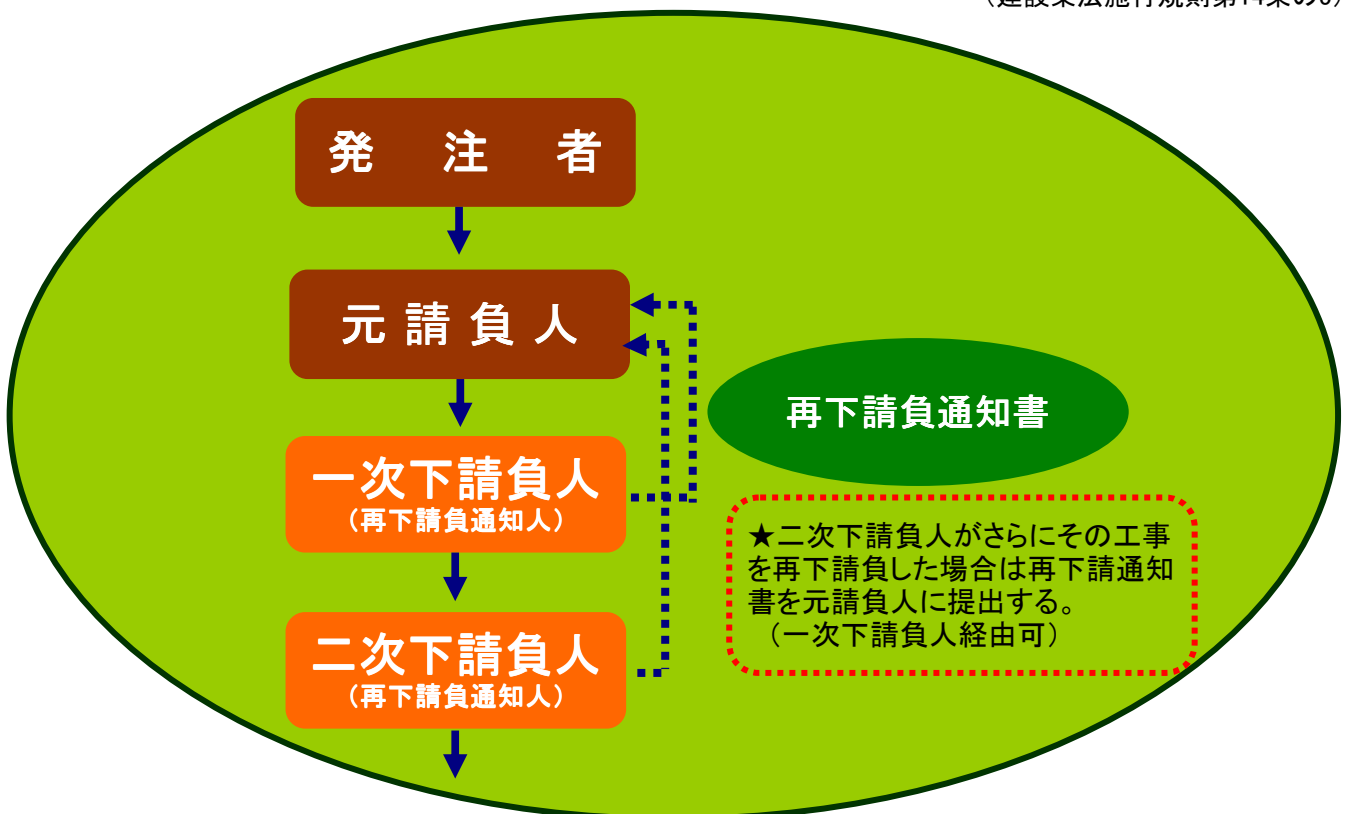
① 自社に関する事項

② 自社が注文者と締結した建設工事の請負契約に関する事項

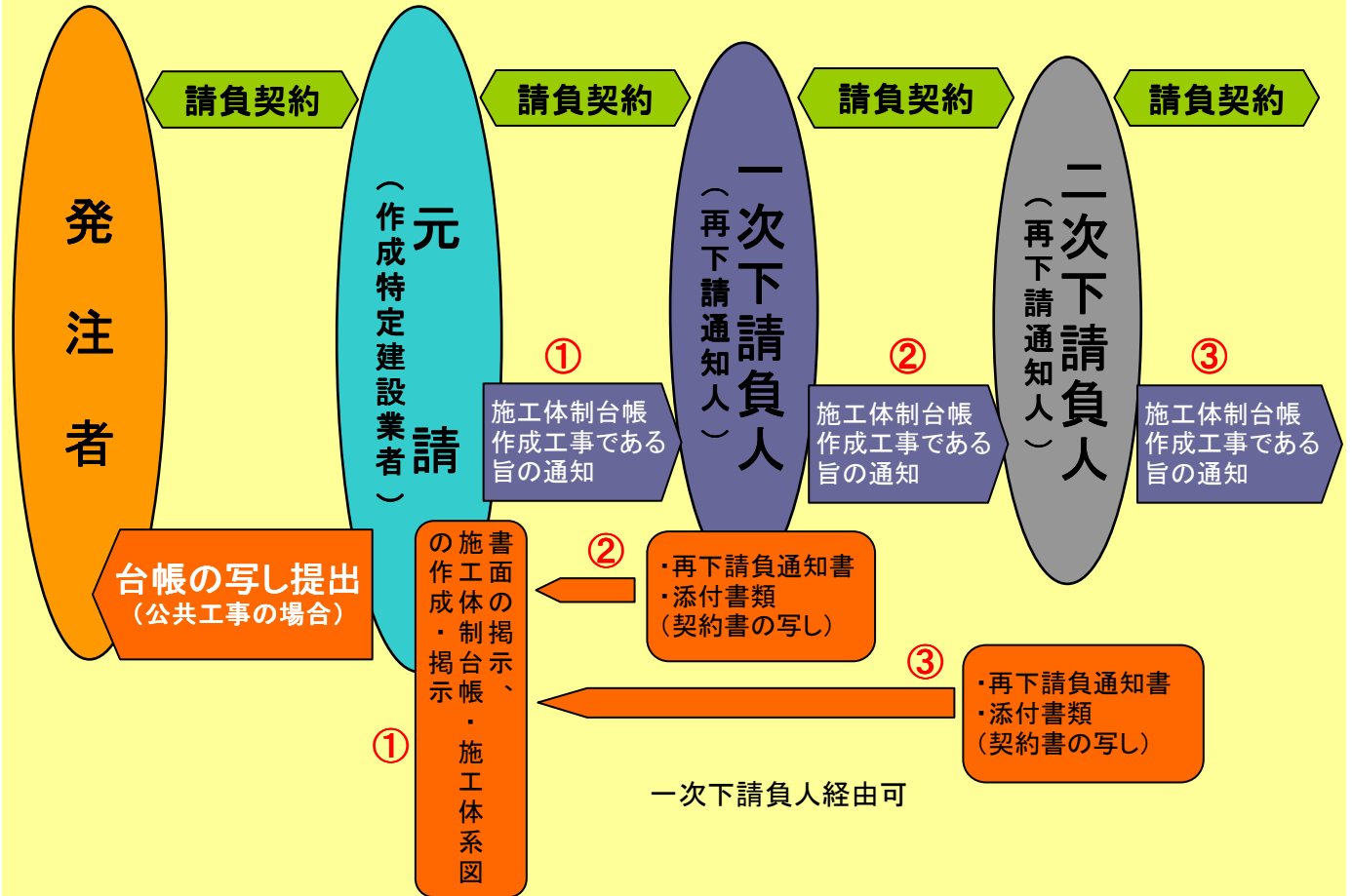
③ 自社が下請契約を締結した再下請負人に関する事項(注)

④ 自社が再下請負人と締結した建設工事の請負契約に関する事項(注)

(注) 添付書類(請負契約書の写し)に記載されている事項は、再下請通知書への記載が省略できます。
(建設業法施行規則第14条の5)



施工体制台帳・作成のフロー図



①一次下請締結後

元請業者である特定建設業者が、作成建設業者に該当することとなったときは、遅滞なく、一次下請負人に対し施工体制台帳作成工事である旨の通知を行うとともに、工事現場の見やすい場所にその旨が記載された書面を掲示し、施工体制台帳及び施工体系図を整備します。

②二次下請締結後

一次下請負人は、作成特定建設業者に対し、再下請負通知書(添付資料である請負契約書の写しを含む)を提出するとともに、二次下請負人に施工体制台帳作成工事である旨の通知を行います。

作成特定建設業者は一次下請負人から提出された再下請負通知書により、又は自ら把握した情報に基づき施工体制台帳及び施工体系図を整備します。

③三次下請締結後

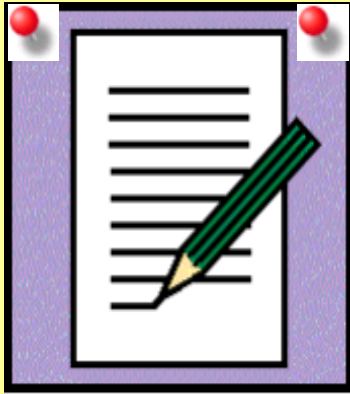
二次下請負人は、作成特定建設業者に対し、再下請負通知書(添付資料である請負契約書の写しを含む)を提出する(一次下請負人を經由して提出することもできる)とともに、三次下請負人に対し施工体制台帳作成工事である旨の通知を行います。

作成特定建設業者は二次下請負人から提出された再下請負通知書若しくは自ら把握した情報に基づき記載する方法又は再下請負通知書を添付する方法のいずれかにより施工体制台帳及び施工体系図を整備します。

「施工体制台帳・施工体系図」作成に係る関係者への周知義務

まずは、施工体制台帳作成工事であることを工事関係者に周知しよう！！

(「施工体制台帳の作成等について」(H7. 6. 20 建設省通知))



掲 示

行う者:元請業者

- 現場内の見やすい場所に再下請負通知書の提出案内を掲示



書面通知

行う者:すべての業者

- 下請に工事を下ろす際以下を書面で通知
- 元請業者の名称 ●再下請負通知が必要な旨

現場への掲示文例

この建設工事の下請負人となり、その請け負った建設工事を他の建設業を営む者に請け負わせた方は、遅滞なく、工事現場内建設ステーション／△△営業所まで、建設業法施行規則(昭和24年建設省令第14号)第14条の4に規定する再下請負通知書を提出して下さい。

一度通知した事項や書類に変更が生じたときも変更の年月日を付記して同様の書類を提出して下さい。

〇〇建設(株)

下請業者への書面通知例

下請負人となった皆様へ

今回、下請負人として貴社に施工を分担していただく建設工事については、建設業法(昭和24年法律第100号)第24条の7第1項により、施工体制台帳を作成しなければならないこととなっています。

①この建設工事の下請負人(貴社)は、その請け負った建設工事を他の建設業を営む者(建設業の許可を受けていない者を含みます。)に請け負わせたときは、建設業法第24条の7第2項の規定により、遅滞なく、建設業法施行規則(昭和24年建設省令第14号)第14条の4に規定する再下請負通知書を当社あてに次の場所まで提出しなければなりません。また一度通知いただいた事項や書類に変更が生じたときも、遅滞なく、変更の年月日を付記して同様の通知書を提出しなければなりません。

②貴社が工事を請け負わせた建設業を営む者に対しても、この書面を複写し交付して、「もしさらに他の者に工事を請け負わせたときは、作成特定建設業者に対する①の通知書の提出と、その者に対するこの書面の写しの交付が必要である」旨を伝えなければなりません。

作成特定建設業者の商号 〇〇建設(株)

再下請負通知書の提出場所 工事現場内建設ステーション／△△営業所



問 14

施工体制台帳の記載内容と添付書類は

施工体制台帳には、作成特定建設業者の許可に関する事項、請け負った建設工事に関する事項、下請負人に関する事項などを記載しなければなりません。(建設業法施行規則第14条の2)

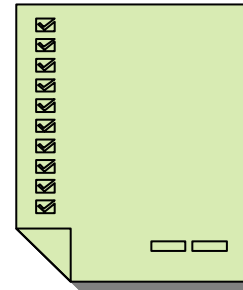
施工体制台帳の記載内容と添付書類



工事内容と建設業許可

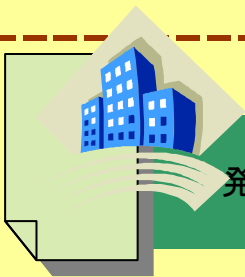


配置技術者の
氏名と資格



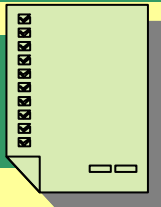
請負契約関係

添付書類



発注者との契約書の写し

下請契約書の写し



元請監理技術者関係

- ◎監理技術者資格者証の写し
- ◎監理技術者の健康保険証等の写し

施工体制台帳の添付書類

①発注者との請負契約書

作成特定建設業者が請け負った建設工事の契約書の写し

②下請契約書

1次下請との契約書の写し及び2次下請以下の下請負人が締結した全ての請負契約書の写し

③元請監理技術者(専門技術者)関係

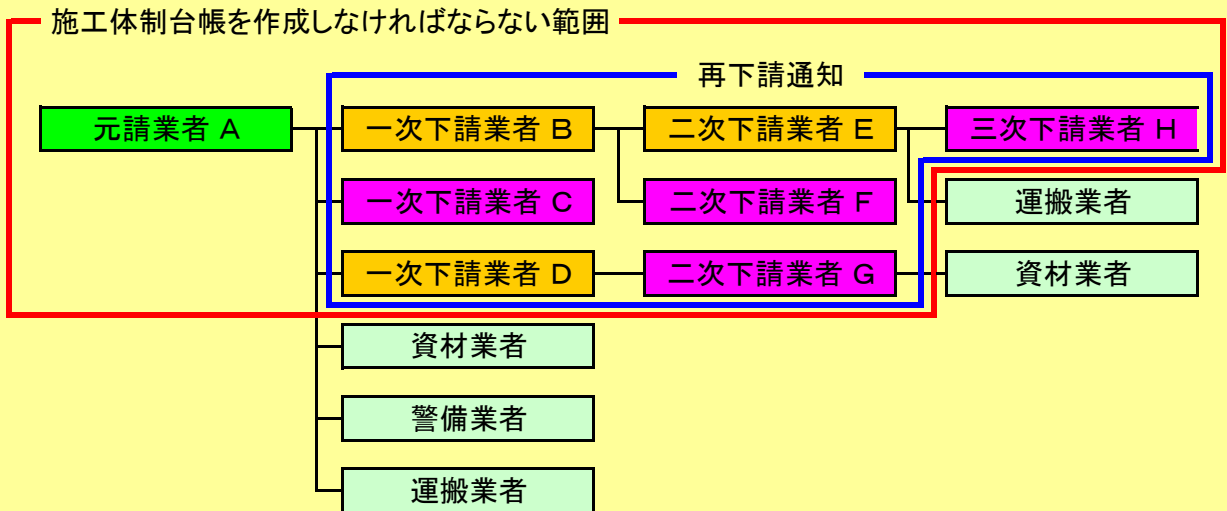
- ◎監理技術者が監理技術者資格を有することを証する書面(監理技術者資格者証写)
- ◎監理技術者が所属建設業者と直接的かつ恒常的な雇用関係にあることを証明するものの写し(健康保険証等の写し)
- ◎専門技術者(置いた場合に限る)の資格及び雇用関係を証する書面

問 15 施工体制台帳記載の下請負人の範囲は

施工体制台帳等に記載すべき下請負人の範囲は、「建設工事の請負」契約における全ての下請負人(無許可業者を含む。)を指しますので、一次下請だけでなく二次下請、三次下請等も記載の対象になります。

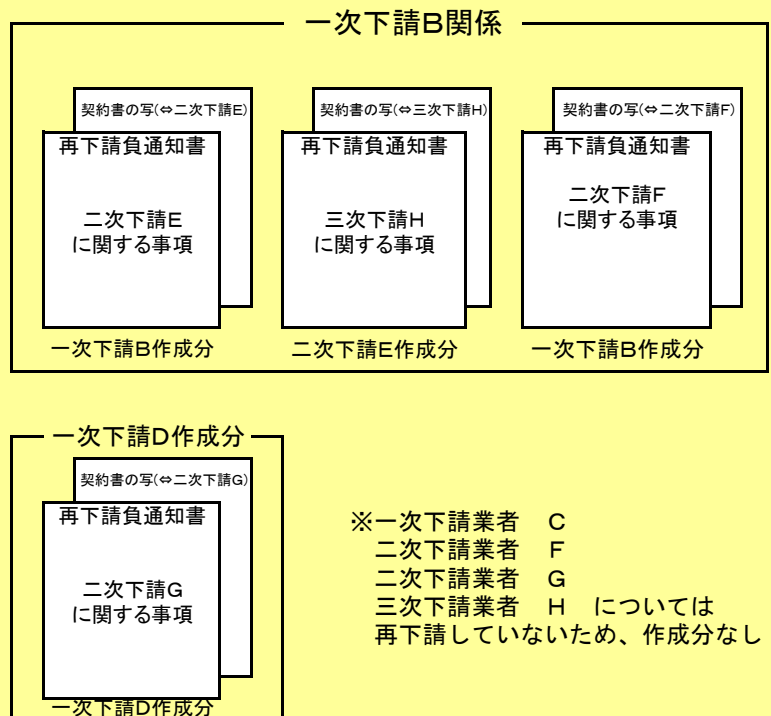
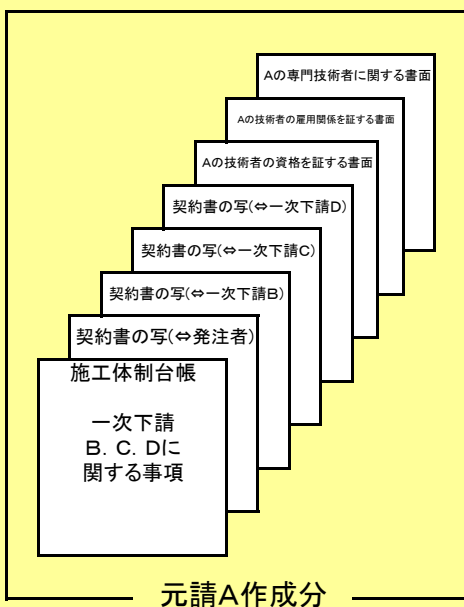
建設工事の請負契約に該当しない資材納入や調査業務、運搬業務などにかかる下請負人等については、建設業法上は記載の必要はありませんが、仕様書等により発注者が記載を求めているときには記載が必要となる場合があります。(例えば、国土交通省発注工事では、警備会社との契約について共通仕様書により記載を求めています。)

1 施工体制台帳の作成範囲



2 施工体制台帳の構成

- ①元請業者と一次下請業者の記載事項と添付書類
- ②再下請負通知の記載事項と添付書類
- ◆①と②を併せた全体で施工体制台帳となる



施工体制台帳記載例

施工体制台帳を作成
又は変更した日付

平成 22年 7月 15日

施工体制台帳

国交建設株式会社

[会社名] _____

[事業所名] _____

作成特定建設業者の商号名称とこの工事を担当する事業所名

作成特定建設業者が受けている許可をすべて記入(業種は略称でも可)

作成特定建設業者が発注者と締結した契約書に記載された工事名称とその工事の具体的内容

作成特定建設業者が発注者と締結した契約書に記載された工期

発注者と契約を締結した作成特定建設業者の営業所

一次下請と契約を締結した作成特定建設業者の営業所

一次下請を監督するために作成特定建設業者が監督員を置いた場合その氏名(*)

作成特定建設業者が現場代理人を置いた場合その氏名(*)

作成特定建設業者が置いた監理技術者の氏名

作成特定建設業者が置いた監理技術者について専任か非専任の該当する方に○印

作成特定建設業者が専門技術者を置いた場合その氏名(*)

建設業の許可	許可業種	許可番号	許可(更新)年月日
	土、建、電、管、鋼、舗、しゆ	工事業	大臣 特定 知事 一般 第99999号
電気通信	工事業	大臣 特定 知事 一般 第99999号	平成 20年 1月 10日

工事名称及び工事内容	〇〇ビル新築工事 / 建築一式(地上6階、地下1階 延床面積 9,600㎡)		
発注者名及び住所	△△商事株式会社 〒123-4567 〇〇県〇		
工期	自 平成 22年 7月 3日 至 平成 23年 3月 8日	契約日	平成 22年 7月 2日

作成特定建設業者が発注者と締結した契約書に記載された契約日

契約営業所	区分	名称	住所
	元請契約	本社	××県××市××町123-4
	下請契約	☆☆支店	〇〇県☆☆市☆☆111

発注者の監督員名	注文 一郎	権限及び意見申出方法	契約書記載のとおり
----------	-------	------------	-----------

発注者が置いた監督員の氏名

監督員名	谷田 三郎	権限及び意見申出方法	契約書記載のとおり
現場代理人名	宮崎 太郎	権限及び意見申出方法	契約書記載のとおり

監理技術者名	専任 宮崎 太郎	資格内容	一級建築施工管理技士
専門技術者名	原田 次郎	専門技術者	資格 担 工事内容
資格内容	実務経験(10年・管)	担 工事内容	
担 工事内容	冷暖房設備工事、給排水設備工事		

監理技術者の資格を具体的に記入(例)一級土木施工管理技士、指導監督の実務経験(電気通信)国土交通大臣特別認定(建築)

専門技術者が担当する工事の具体的内容(*)

専門技術者の資格を具体的に記入(*)
例)第一種電気工事士、実務経験(指定学科3年・電気通信)実務経験(10年・機械器具設置)

- 施工体制台帳の添付書類
1. 作成特定建設業者が請負った建設工事の契約書の写し
 2. 下請負人が請負った建設工事の契約書の写し
 3. 監理技術者の資格を証する書面(監理技術者資格者証の写し)
 4. 監理技術者の雇用を証する書面
 5. 専門技術者(置いた場合に限る)の資格及び雇用を証する書面

下請負人の商号名称

再下請負人が請負った建設工事の契約書に記載された工事名及びその工事の具体的内容

下請負人が請負った建設工事の契約書に記載された工期

《下請負人に関する事項》

会社名	白鳥建設株式会社	代表者名	白鳥 真一
住所	〒0000000-0000 ××県××郡△△町999		
工事名称及び工事内容	〇〇ビル新築工事 / コンクリート工、足場等仮設工、鉄筋工、型枠工		
工期	自平成22年7月15日 至平成22年12月20日	契約日	平成20年7月15日

再下請負人が請負った建設工事の契約書に記載された契約日

下請負人の受けている許可の内、請負った建設工事の施工に必要な業種に係る許可

建設業の許可	施工に必要な許可業		許可番号	許可(更新)年月日
	鉄筋と、大工	工事業	大臣(知事)特定(知事)一般	第123456号
	工事業	大臣(知事)特定(知事)一般	第 号	平成 年 月 日

下請負人が現場代理人を置いた場合その氏名(*)

現場代理人名	白鳥 三郎
権限及び意見申出方法	契約書記載のとおり
主任技術者	専任(非専任) 白鳥 五郎
資格要件	二級建築施工管理技士

安全衛生責任者名	松田 四郎
安全衛生推進者名	松田 四郎
雇用管理責任者名	尾島 五郎
※専門技術者名	
資格要件	
担当工事内容	

下請負人が置いた安全衛生責任者名(*)

下請負人が置いた安全衛生推進者名(*)

下請負人が置いた雇用監理責任者名

下請負人が専門技術者を置いた場合その氏名(*)

下請負人が置いた主任技術者の氏名及び専任か非専任の該当する方に○印(専任が必要かどうかはP6参照)

専門技術者が担当する工事の具体的内容(*)

専門技術者の資格を具体的に記入(*)
例) 第一種電気工事士、
実務経験(指定学科3年・電気通信)
実務経験(10年・機械器具設置)

主任技術者の資格を具体的に記入(*)
例) 二級土木施工管理技士(土木)、
実務経験(指定学科3年・電気通信)
実務経験(10年・機械器具設置)

注意

1. 建設業法では様式は定められていませんので、この様式によらなくてもかまいません。
2. 部分は建設業法で定められた記載事項です。
3. 説明書きの後に(*)がある部分は置かない場合もあるので、そのときは記載不要です。
4. 「権限及び意見の申出方法」欄は、建設業法では相手方に対して通知することになっていますので、その通知書や契約書に定められている場合は、その旨を記載した上書面を添付してください。これによらない場合は具体的に記載してください。

再下請負通知書記載例

再下請負通知書を作成又は変更した日

[備北鉄筋工業(有)(再下請負通知人)が江頭土木(株)
(再下請負人)との下請契約の内容を報告する場合]

平成 22年 8月 10日

再下請負通知書

再下請負通知人が請負った建設工事の注文者の商号名称

直近上位
注文者名 白鳥産業(株)

再下請負通知人が請負った建設工事の作成特定建設業者の商号名称

再下請負通知人の商号名

[報告下請負業者]

住所 〒000-0000
××県××郡××村123

再下請負通知人が請負った建設工事の契約書に記載された工事名称とその工事の具体的内容

元請名称 国交建設(株)

会社名 備北鉄筋工業(有)

代表者名 備北 太郎

《自社に関する事項》

再下請負通知人が請負った建設工事の契約書に記載された工期

工事名称及び
工事内容 ○○ビル新築工事 / 鉄筋工

工期 自平成 22年 8月 3日
至平成 22年12月 8日 契約日 平成 22年 8月 2日

再下請負通知人が受けている許可の内、請負った建設工事の施工に必要な業種に係る許可

建設業の許可	許可業種	許可番号	許可(更新)年月日
	鉄筋 工事業	大臣 特定 知事 一般 第123456号	平成 19年 10月 1日
	工事業	大臣 特定 知事 一般 第 号	平成 年 月 日

再下請負人を監督するために再下請負通知人が監督員を置いた場合その氏名(*)

監督員名

再下請負通知人が置いた
・安全衛生責任者(*)
・安全衛生推進者(*)
・雇用管理責任者
の氏名

安全衛生責任者名 田辺 一郎

再下請負通知人が現場代理人を置いた場合その氏名(*)

権限及び
意見申出方法

安全衛生推進者名 田辺 一郎

現場代理人名 田辺 一郎

雇用管理責任者名 備北 四郎

再下請負通知人が置いた主任技術者の氏名

権限及び
意見申出方法

基本契約約款記載のとおり

※専門技術者名 鈴木 六助

主任技術者 専任
非専任 田辺 一郎

資格要件

再下請負通知人が置いた主任技術者について専任か非専任の該当する方に○印(専任が必要かどうかはP6参照)

資格内容

二級建築施工管理技師(体)

担当工事

主任技術者の資格を具体的に記入
記載例は再下請負人の主任技術者資格
参照★

再下請負通知人が専門技術者を
置いた場合その氏名

専門技術者の資格を具体的に記入(*)
記載例は再下請負人の主任技術者資格
参照★

専門技術者が担当する工事の具体的
内容(*)

再下請負通知書の添付書類

再下請負人通知書と再下請負人が締結した契約書の写し

再下請負人の商号名

再下請負人が請負った建設工事の契約書に記載された工事名及びその工事の具体的内容

《再下請負関係》再下請負業者及び再下請負関係について次のとおり報告いたします。

会社名	江頭土木株式会社	代表者名	江頭 華子
住所	〒 000 000 ××県××郡△△町800		
工事名称及び工事内容	〇〇ビル新築工事 / 鉄筋設置時の重量物揚重運搬配置工事		
工期	自平成 22年 8月 10日 至平成 22年10月 20日	契約日	平成 22年 8月 9日

再下請負人が請負った建設工事の契約書に記載された契約日

再下請負人の受けている許可の内、請負った建設工事の施工に必要な業種に係る許可

建設業の許可	許可業種	許可番号	許可(更新)年月日
	と 工事業	大臣 特定 知事 一般	第987654号
	工事業	大臣 特定 知事 一般	第 号 平成 年 月 日

再下請負人が置いた安全衛生責任者名(*)

現場代理人名	再下請負人が現場代理人を置いた場合その氏名(*)
権限及び意見申出方法	
主任技術者	専任 非専任 江頭 太郎
資格内容	実務経験(指定学科5年・とび土工)

再下請負人が置いた主任技術者の氏名及び専任か非専任の該当する方に○印(専任が必要かどうかはP6参照)

★ 主任技術者の資格を具体的に記入例) 第一種電気工事士、実務経験(指定学科3年・電気通信)実務経験(10年・機械器具設置)

安全衛生責任者名	江頭 太郎
安全衛生推進者名	江頭 太郎
雇用管理責任者名	江頭 華子
※専門技術者名	
資格要件	
担当工事内容	

再下請負人が置いた安全衛生推進者名(*)

再下請負人が置いた雇用管理責任者名

再下請負人が専門技術者を置いた場合その氏名(*)

専門技術者の資格を体的に記入(*)記載例は再下請負人の主任技術者資格参照 ★

専門技術者が担当する工事の具体的内容(*)

注意

1. 建設業法では様式は定められていませんので、この様式によらなくてもかまいません。
2. 部分は建設業法で定められた記載事項です。
3. 説明書きの後に(*)がある部分は置かない場合もあるので、そのときは記載不要です。
4. 「権限及び意見の申出方法」欄は、建設業法では相手方に対して通知することになっていますので、その通知書や契約書に定められている場合は、その旨を記載した上書面を添付してください。これによらない場合は具体的に記載してください。

施工体系図記載例

工事作業所災害防止

作成特定建設業者が発注者と締結した契約書に記載された工期

一次下請を監督するために作成特定建設業者が監督員を置いた場合その氏名(*)

発注者名	△△商事株式会社	工期	自	22年 7月 3日
工事名称	〇〇ビル新築工事		至	23年 3月 8日

作成特定建設業者が置いた監理技術者の氏名(*)

作成特定建設業者の商号名称

元請名	国交建設(株)
監督員名	谷田 三郎
監理技術者名	宮崎 太郎
専門技術者名	原田 次郎
担当工事内容	冷暖房設備工事 給排水設備工事
専門技術者名	
担当工事内容	

作成特定建設業者が専門技術者を置いた場合その氏名(*)

作成特定建設業者が置いた専門技術者が担当する工事の具体的内容(*)

元方安全衛生管理者	古畑 五郎
会長	統括安全衛生責任者 宮崎 太郎
副会長	永田 和男

作成特定建設業者が統括安全衛生責任者を置いた場合その氏名(*)

下請負人が請負った建設工事の具体的内容

下請負人が安全衛生責任者を置いた場合その氏名(*)

下請負人が置いた主任技術者の氏名

下請負人が専門技術者を置いた場合その氏名(*)

下請負人が置いた専門技術者が担当する工事の具体的内容(*)

下請負人が請負った建設工事の契約書に記載された工期

構内電気設備・照明設備工事	会社名	奥末工業(株)
	安全衛生責任者	奥末 四郎
	主任技術者	金田 次郎
	専門技術者	
工期	22年7月10日~23年2月28日	

仮設工・コンクリート工・鉄筋工・足場工・型枠工等	会社名	白鳥産業(株)
	安全衛生責任者	松田 四郎
	主任技術者	白鳥 五郎
	専門技術者	
工期	22年7月15日~22年12月20日	

工事	会社名	
	安全衛生責任者	
	主任技術者	
	専門技術者	
工期	年 月 日 ~ 年 月 日	

工事	会社名	
	安全衛生責任者	
	主任技術者	
	専門技術者	
工期	年 月 日 ~ 年 月 日	

注意

1. 建設業法では様式は定められていませんので、この様式によらずともかまいません。
2. 部分は建設業法で定められた記載事項です。
3. 説明書きの後に(*)がある部分は置かない場合もあるので、そのときは記載不要です。
4. 下請負人が建設業の許可を受けていない場合は下請負人に関する「主任技術者」「専門技術者」に係る部分は記載不要です。

協議会 兼 施工体系図

照明設備	会社名	米倉電工(有)
	安全衛生責任者	米倉 太郎
	主任技術者	米倉 太郎
	専門技術者	
工事	担当工事内容	
	工期	22年10月1日~23年1月31日

	会社名	
	安全衛生責任者	
	主任技術者	
	専門技術者	
工事	担当工事内容	
	工期	年 月 日 ~ 年 月 日

	会社名	
	安全衛生責任者	
	主任技術者	
	専門技術者	
工事	担当工事内容	
	工期	年 月 日 ~ 年 月 日

鉄筋工	会社名	備北鉄筋工業(有)
	安全衛生責任者	田辺 一郎
	主任技術者	田辺 一郎
	専門技術者	鈴木 六助
工事	担当工事内容	
	工期	22年8月3日~22年12月8日

鉄筋設置時の重量物の揚重運搬配置	会社名	江頭土木(株)
	安全衛生責任者	江頭 太郎
	主任技術者	江頭 太郎
	専門技術者	
工事	担当工事内容	
	工期	22年8月10日~22年10月20日

	会社名	
	安全衛生責任者	
	主任技術者	
	専門技術者	
工事	担当工事内容	
	工期	年 月 日 ~ 年 月 日

型枠工	会社名	荒神工務店(株)
	安全衛生責任者	荒神 次郎
	主任技術者	荒神 次郎
	専門技術者	荒神 次郎
工事	担当工事内容	
	工期	22年8月3日~22年11月30日

	会社名	
	安全衛生責任者	
	主任技術者	
	専門技術者	
工事	担当工事内容	
	工期	年 月 日 ~ 年 月 日

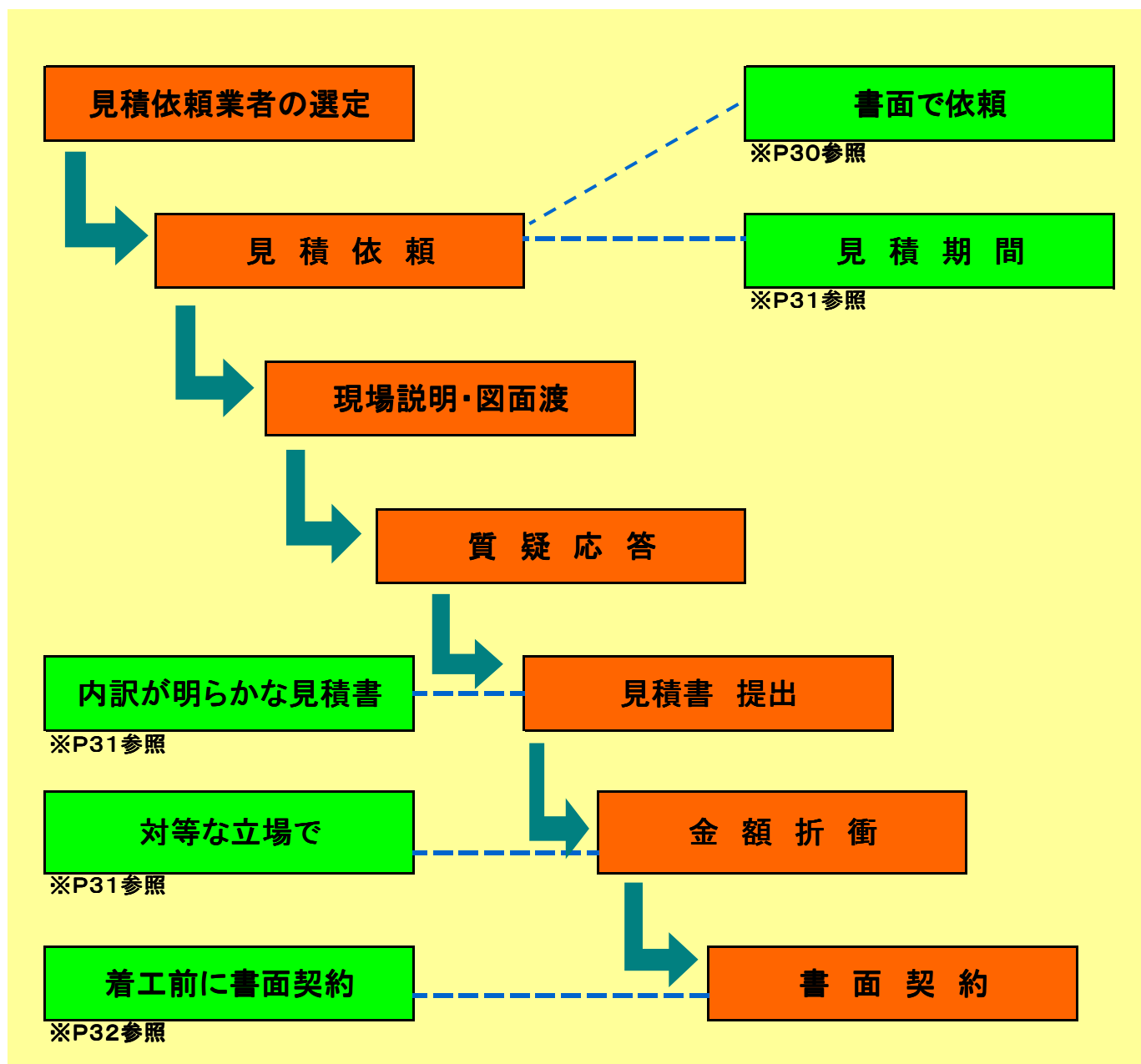
	会社名	
	安全衛生責任者	
	主任技術者	
	専門技術者	
工事	担当工事内容	
	工期	年 月 日 ~ 年 月 日

	会社名	
	安全衛生責任者	
	主任技術者	
	専門技術者	
工事	担当工事内容	
	工期	年 月 日 ~ 年 月 日

	会社名	
	安全衛生責任者	
	主任技術者	
	専門技術者	
工事	担当工事内容	
	工期	年 月 日 ~ 年 月 日

	会社名	
	安全衛生責任者	
	主任技術者	
	専門技術者	
工事	担当工事内容	
	工期	年 月 日 ~ 年 月 日

<下請契約締結に至るまでのフロー>



<標準的な見積費目>

直接工事費 + 共通仮設費 + 現場管理費 + 諸経費

適正な元請下請関係の構築のためには、個々の下請契約が各々の対等な立場における合意に基づいて締結される必要があります。(建設業法第18条)

**見積依頼は書面で行う
見積にあたっては下請契約の具体的内容を提示することが必要**

工事見積条件を明確にするため、見積依頼は以下の事が記載された書面で行いましょう。(建設業法第20条第3項)
契約書に記載しておかなければならない重要事項14項目のうち、請負代金の額を除いた13項目となります。

①工事内容 (※)下記参照

②工事着手の時期及び工事完成の時期

③請負代金の全部又は一部の前金払又は出来形部分に対する支払の定めをする時は、その支払時期及び方法

④当事者の一方から設計変更又は工事着手の延期若しくは工事の全部若しくは一部の中止の申し出があった場合における工期の変更、請負代金の額の変更又は損害の負担及びそれらの額の算定方法に関する定め

⑤天災その他の不可抗力による工期の変更又は損害の負担及びその額の算定方法に関する定め

⑥価格等(物価統制令(昭和21年勅令第118号)第2条に規定する価格等をいう)の変動若しくは変更に基づく請負代金の額又は工事内容の変更

⑦工事の施工により第三者が損害を受けた場合における賠償金の負担に関する定め

⑧注文者が工事に使用する資材を提供し、又は建設機械その他の機械を貸与するときは、その内容及び方法に関する定め

⑨注文者が工事の全部又は一部の完成を確認するための検査の時期及び方法並びに引渡し時期

⑩工事完成後における請負代金の支払の時期及び方法

⑪工事の目的物の瑕疵を担保すべき責任又は当該責任の履行に関して講ずべき保証保険契約の締結その他の措置に関する定めをするときは、その内容

⑫各当事者の履行の遅滞その他債務の不履行の場合における遅延利息、違約金その他の損害金

⑬契約に関する紛争の解決方法

(※)「工事内容」については最低限次の8つの事項が明示されている必要があります。

①工事名称

②施工場所

③設計図書(数量等を含む)

④下請工事の責任施工範囲

⑤下請工事の工程及び下請工事を含む工の全体工程

⑥見積条件及び他工種との関係部位、特殊部分に関する事項

⑦施工環境、施工制約に関する事項

⑧材料費、産業廃棄物処理等に係る元請下請間の費用負担区分に関する事項

<見積期間>

建設工事の合理的かつ適正な施工を図るためには、あらかじめ、契約の重要な事項を下請負人に提示し、下請負人が適切に見積を行うに足りる期間を設けなければなりません。(建設業法第20条第3項)

下請負契約内容の提示から下請契約の締結までの間に設けなければならない見積期間については以下のよう定められています。(建設業法施行令第6条)

下請工事の予定価格の金額	見積期間
①500万円に満たない工事	中 1 日以上
②500万円以上5000万円に満たない工事	中 10 日以上
③5000万円以上の工事	中 15 日以上

注) 予定価格が②③の工事については、やむを得ない事情があるときに限り、見積期間をそれぞれ、**5日以内**に限り短縮することができます。

現場説明・図面渡

- ◆見積条件の明確化
- ◆見積費目の提示・確認
- ◆図面・仕様書の提示・確認

質疑応答

- ◆質問内容の明確化・迅速な質問
- ◆職務上権限を有する者同士の対応
- ◆見積条件内容の確定

見積書提出 <内訳が明らかな見積書>

建設工事の見積書は「工事の種類」ごとに「経費の内訳」が明らかとなったものでなければなりません。

工事の種類	切土、盛土、型枠工事、鉄筋工事のような「工種」及び本館、別館のような「目的物の別」
経費の内訳	労務費、材料費、共通仮設費、現場管理費、機械経費等の別

金額折衝 <対等な立場で>

建設工事の請負契約の当事者は、各々の対等な立場における合意に基づいて公正な契約を締結しなければなりません(建設業法第18条)。したがって、自己の取引上の地位を不当に利用し、通常必要と認められる原価に満たない金額で請負契約を締結してはいけません。(建設業法第19条の3)

ワンポイントアドバイス

下請業者との見積合わせ時には、貴社が行った査定の詳細をきちんと説明しましょう！！

建設工事の請負代金については「半値八がけ」と言われるように、合理的な根拠もないまま金額の交渉を行っている例があるとの指摘がされています。

合理的な根拠もなく、原価にも満たない安い代金で下請業者に工事を無理矢理押しつけた場合には、建設業法に違反します。

自らが行った査定の方法を下請業者にきっちり説明し、両者合意のもとで契約を行いましょう。

【具体的な事例】 建設業法令遵守ガイドライン 1. 見積条件の提示

問 17

請負契約書はなぜ必要か

請負契約は民法上は口約束でも効力を生じますが、契約内容をあらかじめ書面で明確にすることで、請負代金、施工範囲等に係る元請下請間の紛争を防ぐことが目的です。

下請契約に当たっては、契約の内容となる一定の重要事項を明示した適正な契約書を作成し、下請工事着工前までに署名又は記名押印して相互に交付しなければなりません。(建設業法第19条、「建設産業における生産システム合理化指針について」(H3. 2. 5 建設省通知))

建設業法では以下の**14項目**が必ず記載されていなければなりません。

契約書に記載しておかなければならない重要14項目

- | | |
|---|---|
| <p>① 工事内容</p> <p>② 請負代金の額</p> <p>③ 工事着手の時期及び工事完成の時期</p> <p>④ 請負代金の全部又は一部の前金払又は出来形部分に対する支払の定めをするときは、その支払時期及び方法</p> <p>⑤ 当事者の一方から設計変更又は工事着手の延期若しくは工事の全部若しくは一部の中止の申し出があった場合における工期の変更、請負代金の額の変更又は損害の負担及びそれらの額の算定方法に関する定め</p> <p>⑥ 天災その他の不可抗力による工期の変更又は損害の負担及びその額の算定方法に関する定め</p> <p>⑦ 価格等(物価統制令(昭和21年勅令第118号)第2条に規定する価格等をいう)の変動若しくは変更に基づく請負代金の額又は工事内容の変更</p> | <p>⑧ 工事の施工により第三者が損害を受けた場合における賠償金の負担に関する定め</p> <p>⑨ 注文者が工事に使用する資材を提供し、又は建設機械その他の機械を貸与するときは、その内容及び方法に関する定め</p> <p>⑩ 注文者が工事の全部又は一部の完成を確認するための検査の時期及び方法並びに引渡しの時期</p> <p>⑪ 工事完成後における請負代金の支払の時期及び方法</p> <p>⑫ 工事の目的物の瑕疵を担保すべき責任又は当該責任の履行に関して講ずべき保証保険契約の締結その他の措置に関する定めをするときは、その内容</p> <p>⑬ 各当事者の履行の遅滞その他債務の不履行の場合における遅延利息、違約金その他の損害金</p> <p>⑭ 契約に関する紛争の解決方法</p> |
|---|---|

建設リサイクル法対象工事の場合は、以下の4項目を加え、記載しなければなりません。

- | | |
|-----------------------|---------------|
| ① 分別解体の方法 | ② 解体工事に要する費用 |
| ③ 再資源化するための施設の名称及び所在地 | ④ 再資源化等に要する費用 |

建設業法では、基本的には両者の署名又は記名押印により契約書を作成することとされていますが、注文書・請書を相互に交付することでもかまいません。

公共工事・民間工事 とも

契約内容を以下のいずれかの書面で作成します。

- | | |
|---|-----------------|
| ① | 契 約 書 |
| ② | 注文書・請書 + 基本契約書 |
| ③ | 注文書・請書 + 基本契約約款 |

(注) 契約書記載事項の**14項目**は必ず記載



- 【具体的な事例】 建設業法令遵守ガイドライン
2. 書面による契約締結、3. 不当に低い請負代金、
 4. 指値発注、5. 不当な使用資材等の強制購入、
 6. やり直し工事、7. 赤伝処理、8. 工期

建設業法では、請負契約の内容を適切に整理した帳簿を各営業所ごとに備える必要があります。(建設業法第40条の3)

帳簿には **5年間** の保存義務があるので注意しましょう。(建設業法施行規則第28条)

発注者と締結した住宅を新築する建設工事に係るものにあつては、**10年間** となります。

帳簿に記載しておかなければならない内容(建設業法施行規則第26条第1項)

- 1 営業所の代表者の氏名及びその就任日
- 2 注文者と締結した建設工事の請負契約に関する以下の事項
 - (1) 請け負った建設工事の名称、工事現場の所在地
 - (2) 注文者との契約日
 - (3) 注文者の商号、住所、許可番号
 - (4) 「注文者から受けた完成検査」の年月日
 - (5) 「工事目的物を注文者に引き渡した」年月日
- 3 発注者と締結した住宅の新築工事の請負契約に関する次の事項
 - (1) 当該住宅の床面積
 - (2) 建設業者の建設瑕疵負担割合
 - (3) 発注者に交付している住宅瑕疵担保責任保険法人
- 4 下請契約に関する事項
 - (1) 下請負人に請け負わせた建設工事の名称、工事現場の所在地
 - (2) 下請負人との契約日
 - (3) 下請負人の商号、住所、許可番号
 - (4) 下請工事の完成を確認するために「自社が行った検査」の年月日
 - (5) 下請工事の目的物について「下請業者から引き渡しを受けた」年月日

注意 特定建設業の許可を受けている者が注文者(元請工事に限らない。)となって一般建設業者(資本金が4,000万円以上の法人企業を除く。)に建設工事を下請負した場合には、以下の事項についても記載が必要となります。

- ① 支払った下請代金の額、支払った年月日及び支払手段
- ② 支払手形を交付したときは、その手形の金額、交付年月日、手形の満期
- ③ 代金の一部を支払ったときは、その後の下請代金の支払残額
- ④ 遅延利息の額・支払日(下請負人から引き渡しの申出から50日を経過した場合に発生する遅延利息(年14.6%)の支払に係るもの)

帳簿に添付しておかなければならない書類(建設業法施行規則第26条第2項)

- 1 契約書又はその写し(電磁的記録可)
- 2 特定建設業の許可を受けている者が注文者(元請工事に限らない。)となって一般建設業者(資本金が4,000万円以上の法人企業を除く。)に建設工事を下請負した場合には、下請代金の支払済額、支払った年月日及び支払手段を証明する書類(領収書等)又はその写し
- 3 特定建設業の許可を受けている者が注文者(元請工事に限る。)となって、3,000万円(建築一式工事の場合は4,500万円。一次下請業者への下請代金の総額で判断。)以上の下請契約を締結した場合には、工事現場に備え付ける施工体制台帳の以下の部分。(工事完了後に施工体制台帳から必要な部分のみを抜粋します。)
 - (1) 当該工事に関し、実際に工事現場に置いた監理技術者の氏名、有する監理技術者資格
 - (2) 監理技術者以外に専門技術者を置いたときは、その者の氏名、その者が管理を担当した建設工事の内容、有する主任技術者資格
 - (3) 下請負人(末端までの全業者を指しています。以下同じ。)の商号、許可番号
 - (4) 下請負人に請け負わせた建設工事の内容、工期
 - (5) 下請業者が実際に工事現場に置いた主任技術者の氏名、有する主任技術者資格
 - (6) 下請負人が主任技術者以外に専門技術者を置いたときは、その者の氏名、その者が管理を担当した建設工事の内容、有する主任技術者資格

施工体制台帳



帳簿と同様に保存しておかなければならない書類(建設業法施行規則第27条)

○ 営業に関する図書

1 営業に関する図書とは

- (1) 完成図
- (2) 発注者との打合せ記録
- (3) 施工体系図

2 保存すべき図書

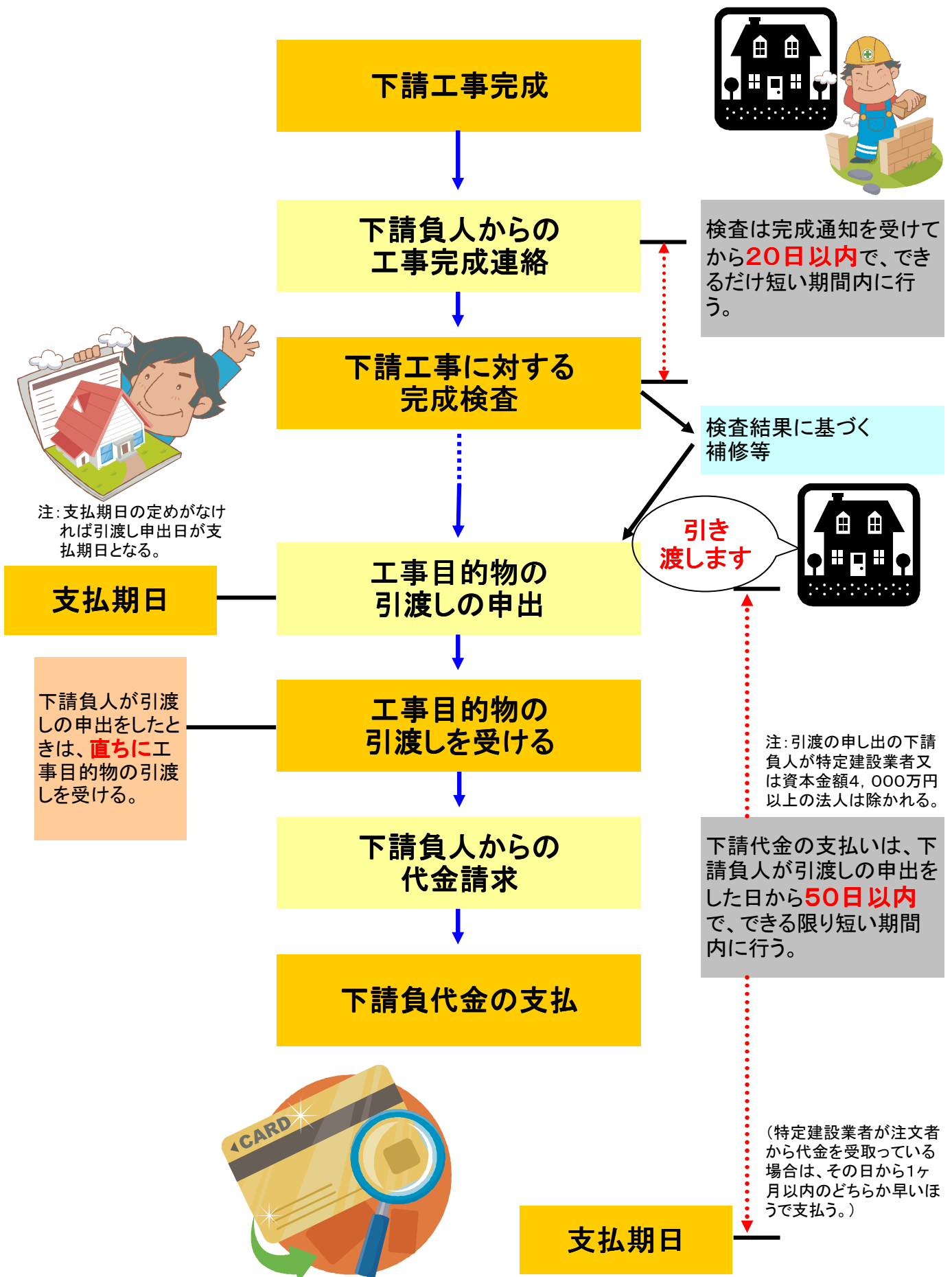
- (1) 建設業法第24条の7第1項の規定により施工体制台帳を作成する場合における当該特定建設業者 1の(1)～(3)
- (2) (1)以外の元請業者 1の(1)～(2)

3 保存期間

いずれの図書も、当該目的物の引渡しをしたときから10年間

【具体的な事例】 建設業法令遵守ガイドライン 11. 帳簿の備付け及び保存

検査・引渡・下請代金の支払いフロー<特定建設業者>

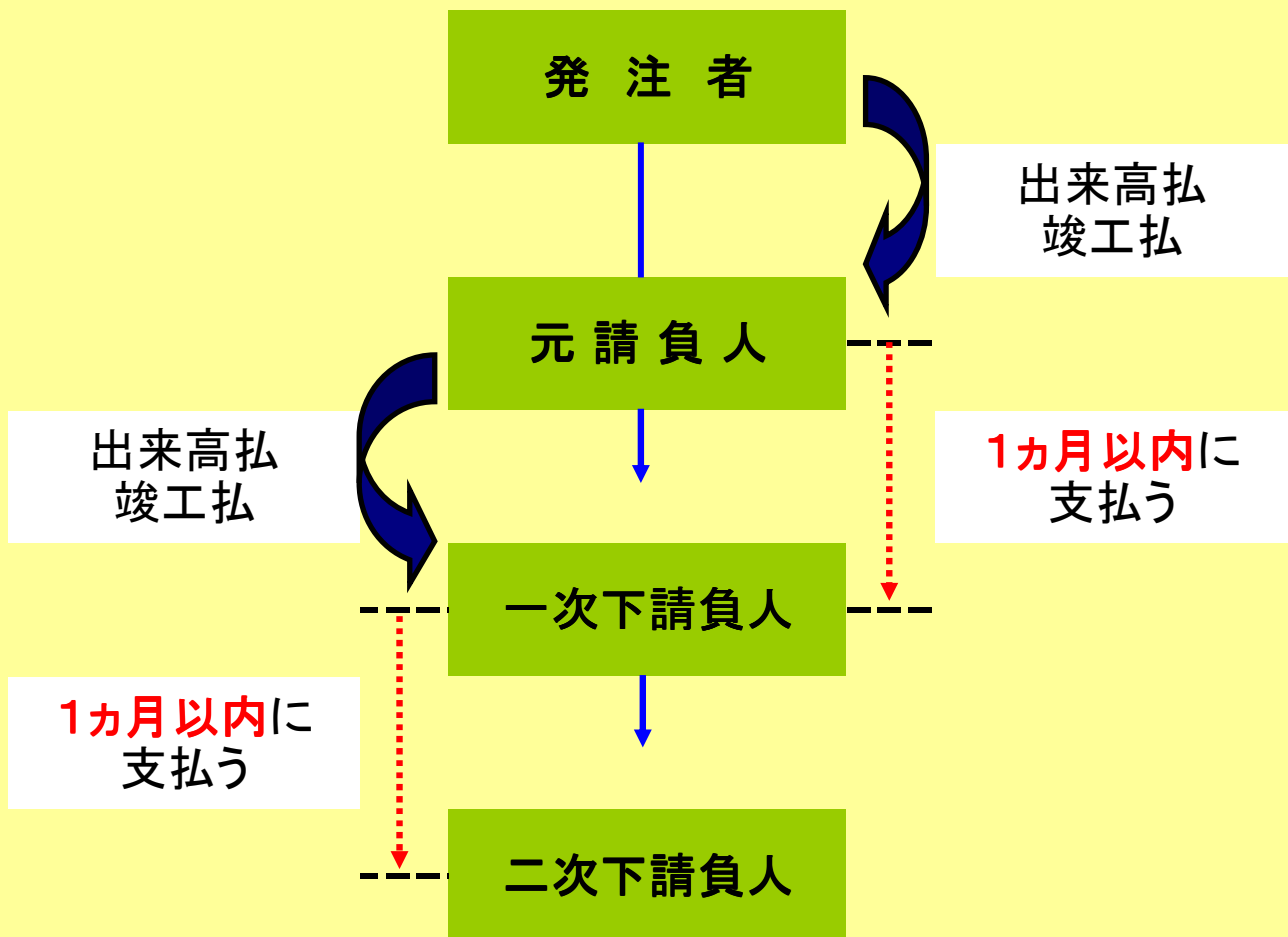


下請代金が適正に支払われなければ、下請負人の経営の安定が阻害されるばかりでなく、ひいてはそれが手抜き工事、労災事故等を誘発し、建設工事の適正な施工の確保が困難になりかねません。建設業法では、工事の適正な施工と下請負人の利益保護を目的として、下請代金の規定を設けています。

ポイント 1

注文者から請負代金の出来高払い又は竣工払いを受けたときは、その支払対象となった工事を施工した下請負人に対して、相当する下請代金を**1ヵ月以内**に支払わなければなりません。(建設業法第24条の3第1項)

<上位注文者から出来高払・竣工払の支払を受けたら>



下請代金の支払は、出来高払い又は竣工払いのいずれの場合においても、できる限り早く行うことが必要です。**1ヵ月以内**という支払期間は、毎月一定の日に代金の支払を行うことが多いという建設業界の商慣習を踏まえて、定められたものですから、1ヵ月以内であればいつでもよいというものではなく、出来る限り短い期間内に支払われなければなりません。

ポイント 2

下請代金の支払いは、できる限り**現金払い**としなければなりません。手形で支払う場合においても、手形期間は**120日以内**で、できるだけ短い期間としましょう。（「建設産業における生産システム合理化指針」）

請負代金の支払いは、できる限り現金払いとし、現金払いと手形払いを併用する場合であっても、支払代金に占める現金比率を高めるとともに、少なくとも労務費相当分は現金払いとしましょう。手形期間が120日を超えるものについては、割引困難な手形に該当する恐れがあるので、手形期間は120日以内としましょう。

ポイント 3

前払金を受けたときは、下請負人に対して資材の購入、労働者の募集その他建設工事の着手に必要な費用を前払金として支払うよう配慮しなければなりません。（建設業法第24条の3第2項）

建設工事においては、発注者から資材の購入や労働者の募集等建設工事の着手のために必要な準備金の前払金として支払われることが慣行となっていますが、このような資材購入等の準備行為は元請負人だけでなく下請負人によっても行われることも多いので、元請負人が前払金を受けたときは下請負人に対しても工事着手に必要な費用を前払金として支払うよう努めるべきこととしています。

ポイント 4

下請工事の完成を確認するための検査は、工事完成の通知を受けた日から**20日以内**に行い、かつ、検査後に下請負人が引渡しを申し出たときは、**直ちに**工事目的物の引渡しを受けなければなりません。（建設業法第24条の4）



◆検査は工事完成の通知日から20日以内で、できる限り短い期間内に行いましょう。

◆下請負人からの「工事完成の通知」や「引渡しの申出」は口頭でも足りませんが、後日の紛争を避けるため書面で行うことが適切です。

ポイント 5

特定建設業者は、下請負人(特定建設業者又は資本金額が4,000万円以上の法人を除く。)からの引渡し申出日から起算して**50日以内**に下請代金を支払わなければなりません。(建設業法第24条の5 第1項)

特定建設業者の制度は下請負人保護のために設けられたものですから、特定建設業者については、注文者から支払いを受けたか否かにかかわらず、工事完成の確認後、下請負人から工事目的物の引渡しの申出があったときは、申出の日から50日以内に下請代金を支払わなければならないことになっています。

2つの支払期日の関係は？

特定建設業者は、元請としての義務【ポイント1】と特定建設業者の義務【ポイント5】の両方の義務を負うので、出来高払いや竣工払いを受けた日から**1ヵ月以内**か、引渡しの申出から**50日以内**の支払期日(支払期日の定めがなければ引渡し申出日)のいずれか早い方が実際の支払日になります。



【具体的な事例】 建設業法令遵守ガイドライン 9. 支払保留、10. 長期手形

問 20

建設業法で定める標識の掲示とは

建設業法では、建設業の営業又は建設工事の施工が建設業法による許可を受けた適法な業者によってなされていることを対外的に明らかにするため、建設業者に対し、その店舗及び建設工事現場ごとに、一定の標識を掲げることを義務づけています。(建設業法第40条)

建設業の許可を受けた建設業者が標識を店舗に掲げる場合

35cm 以上	建設業の許可票			
	商号又は名称			
	代表者の氏名			
	一般建設業又は特定建設業の別	許可を受けた建設業	許可番号	許可年月日
			国土交通大臣許可()第 号 知事	
	この店舗で営業している建設業			

40cm以上

記載要領

「国土交通大臣 知事」については、不要のものを消すこと。

建設業の許可を受けた建設業者が標識を建設工事の現場に掲げる場合

40cm 以上	建設業の許可票			
	商号又は名称			
	代表者の氏名			
	主任技術者の氏名	専任の有無		
	資格名	資格者証交付番号		
	一般建設業又は特定建設業の別		許可を受けた建設業	
	許可番号	国土交通大臣 知事 許可()第		号
	許可年月日			

40cm以上

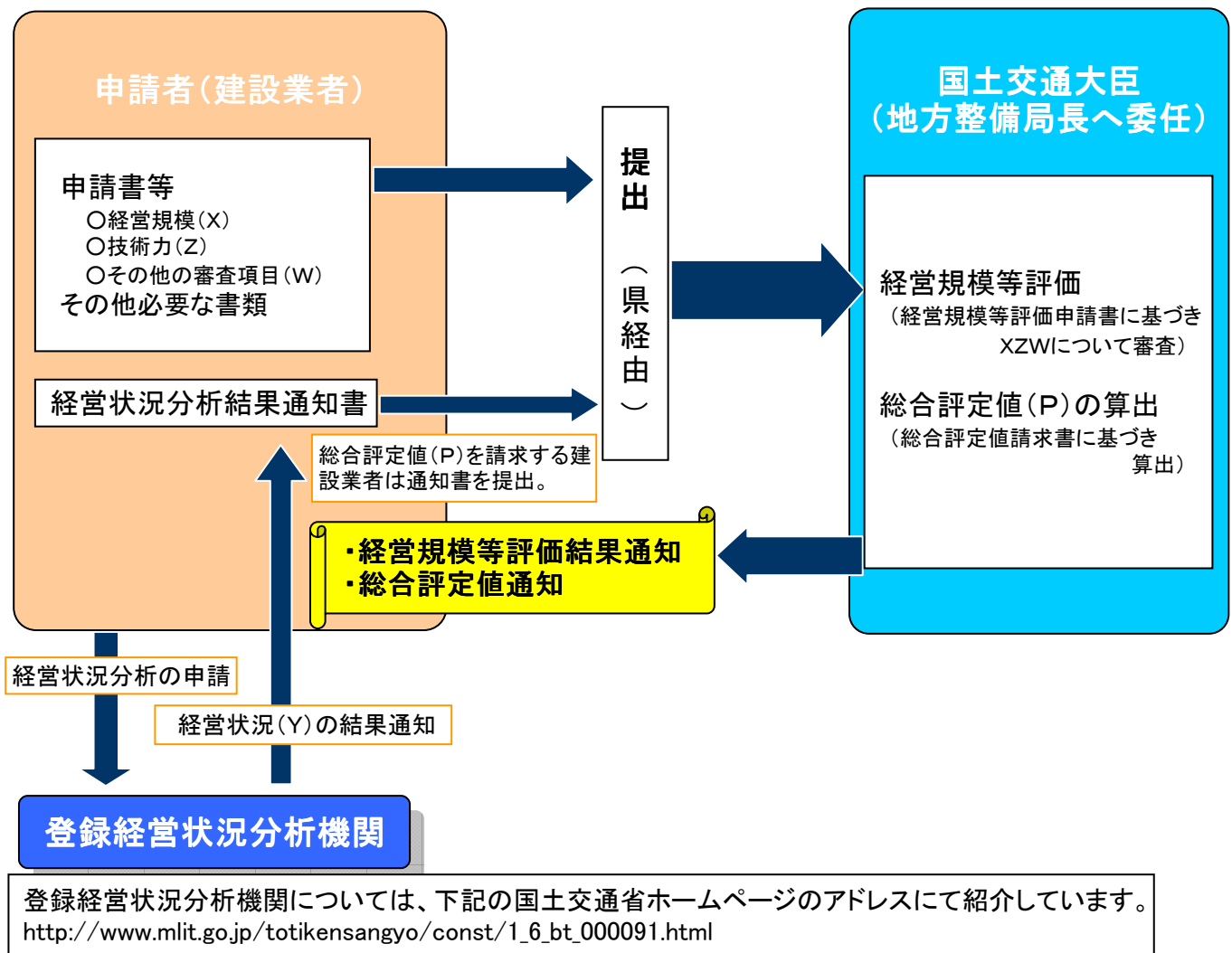
記載要領

- 「主任技術者の氏名」の欄は、法第26条第2項の規定に該当する場合には、「主任技術者の氏名」を「監理技術者の氏名」とし、その監理技術者の氏名を記載すること。
- 「専任の有無」の欄は、法第26条第3項の規定に該当する場合には、「専任」と記載すること。
- 「資格名」の欄は、当該主任技術者又は監理技術者が法第7条第2号又は法第15条第2号イに該当する者である場合に、その者が有する資格等を記載すること。
- 「資格者証交付番号」の欄は、法第26条第4項に該当する場合に、当該監理技術者が有する資格者証の交付番号を記載すること。
- 「許可を受けた建設業」の欄には、当該建設工事の現場で行っている建設工事に係る許可を受けた建設業を記載すること。
- 「国土交通大臣 知事」については、不要のものを消すこと。

公共工事を発注者から直接請け負う建設業者は、その経営に関する客観的事項について審査を受けなければなりません。(建設業法27条の23)

経営事項審査は、経営状況分析(Y)と、経営規模等評価(X・Z・W)の事項について、全国一律の数値評価で行われます。経営状況分析は国土交通大臣の登録を受けた経営状況分析機関が審査し、経営規模等評価は建設業の許可行政庁が審査します。

なお、公共工事の発注者は、工事の発注に際して、客観的事項としてこの総合評定値を活用するほか、過去の工事成績、特別な工事の実施状況等の主観的事項についても審査し、判断材料としています。



経営事項審査結果の公表について

経営事項審査結果は、公共工事入札参加希望者選定手続の透明性の一層の向上による公正さの確保、企業情報の開示や相互監視による虚偽申請の抑止力の活用といった観点から、公表を行っています。

公表及び閲覧は、財団法人建設業情報管理センターのホームページ上から閲覧可能です。

虚偽申請の罰則及び行政処分について

経営事項審査の提出書類に虚偽の記載をして提出したものについては、建設業法第28条に基づき監督処分の対象になります。(完成工事高水増し等の虚偽申請→**30日以上**の営業停止処分 など)

また、場合によっては建設業法第50条に基づき懲役、罰金等の刑事罰に処せられます。

建設業者が建設業法や入札契約適正化法に違反すると建設業法の監督処分の対象になります。監督処分には、指示処分、営業停止処分、許可の取消処分の3種類があります。

指示処分(建設業法第28条第1項、第2項)

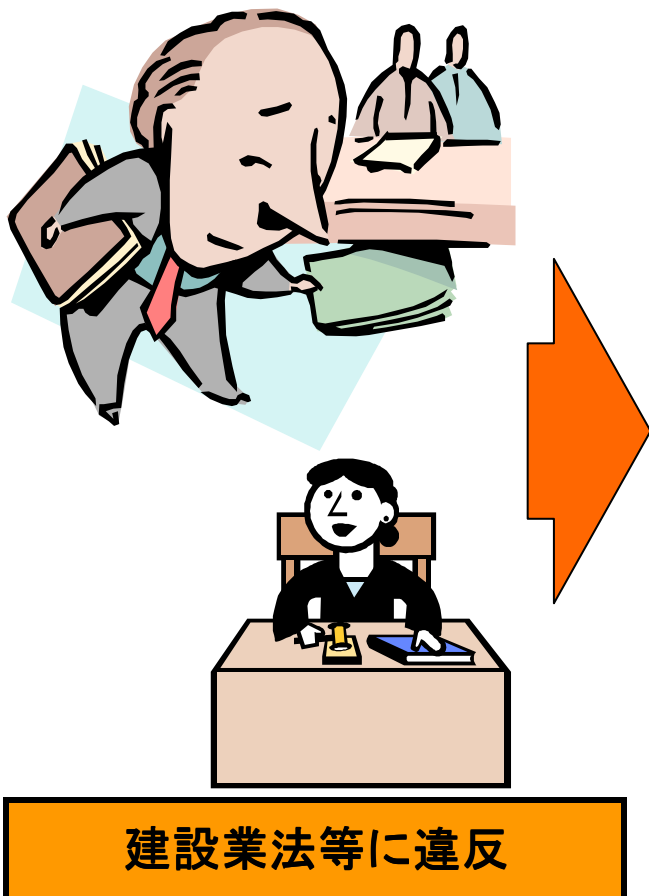
建設業者が建設業法に違反すると、監督行政庁の指示処分の対象になります。指示処分とは、法令や不適正な事実を是正するために企業がどのようなことをしなければならないか、監督行政庁が命令するものです。

営業停止処分(建設業法第28条第3項)

建設業者が指示処分に従わないときには、監督行政庁による営業停止処分の対象になります。一括下請禁止規定の違反や独占禁止法、刑法などの他法令に違反した場合などには、指示処分なしで直接営業停止処分がかけられることがあります。営業の停止期間は1年以内で監督行政庁が判断して決定します。

許可取消処分(建設業法第29条)

不正手段で建設業の許可を受けたり、営業停止処分に違反して営業したりすると監督行政庁によって、建設業の許可の取り消しがなされます。一括下請禁止規定の違反や独占禁止法、刑法などの他法令に違反した場合などで、情状が特に重いと判断されると指示処分や営業停止処分なしで、即、許可取消となります。



【建設業許可行政庁】
地方整備局長、各県知事

違反の内容により

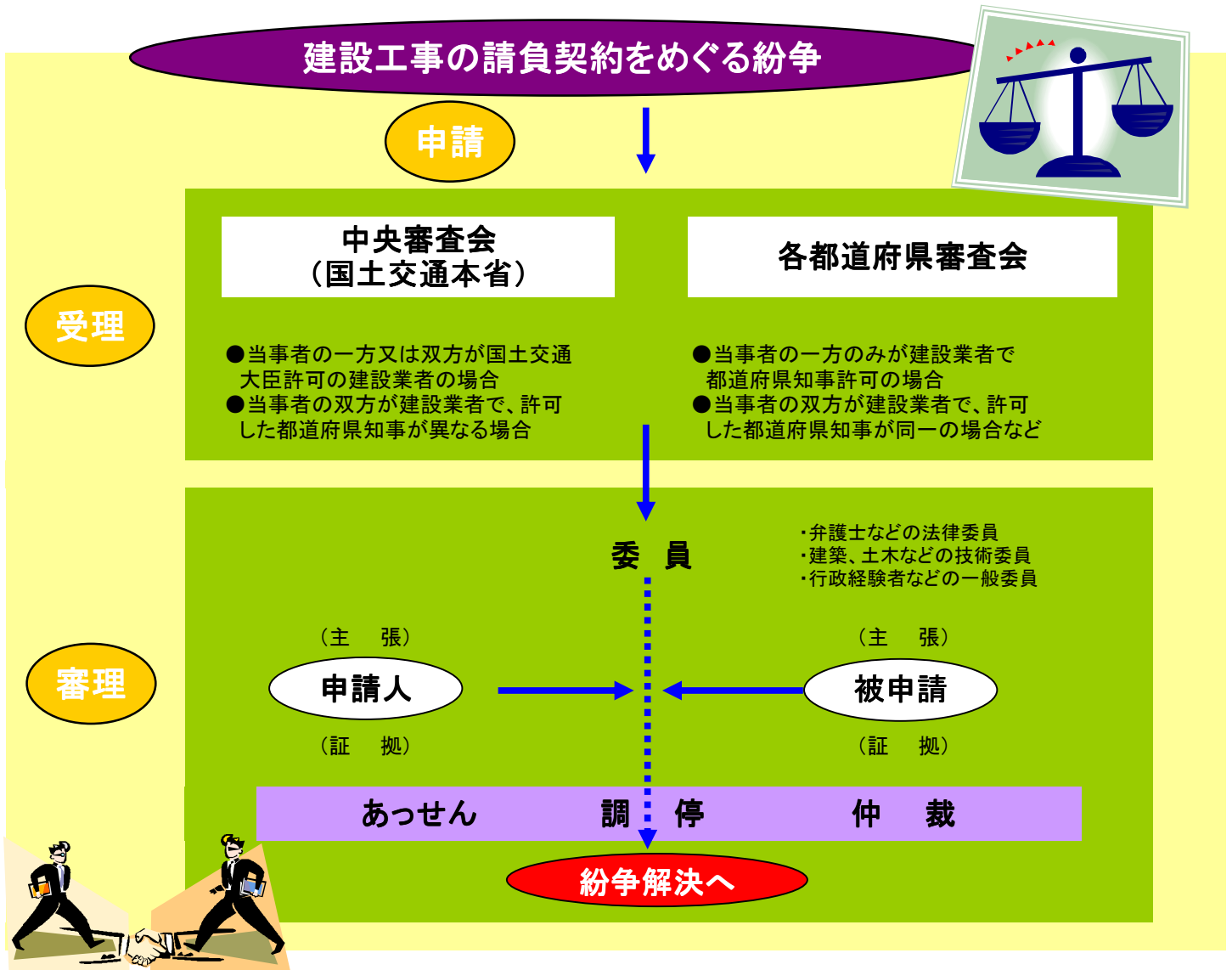
指示(業務改善命令)

1年以内の営業停止

許可の取り消し

建設業法等に違反

建設工事紛争審査会は、工事に雨漏りなどの欠陥(瑕疵)があるのに補修してくれない、工事代金を支払ってもらえないといった建設工事の請負契約を巡る紛争の解決を図る機関で、中央(国土交通本省)と各都道府県に置かれています。(建設業法第25条)



建設工事紛争審査会事務局の住所・電話番号一覧(九州地方整備局管内関係分)

審査会名	担当部局	住所	電話番号
中央	国土交通省 総合政策局 建設業課 紛争調整官室	〒100-8918 千代田区霞ヶ関2-1-3	03-5253-8111
福岡県	建築都市部建築指導課建設業係	〒812-8577 福岡市博多区東公園7-7	092-643-3719
佐賀県	県土づくり本部建設・技術課	〒840-8570 佐賀市城内1-1-59	0952-25-7317
長崎県	土木部監理課建設業指導班	〒850-8570 長崎市江戸町2-13	095-824-1111
熊本県	土木部監理課建設業係	〒862-8570 熊本市水前寺6-18-1	096-383-1111
大分県	土木建築部土木建築企画課 建設業指導班	〒870-8501 大分市大手町3-1-1	097-536-1111
宮崎県	土木部管理課建設業係	〒880-8501 宮崎市橘通東2-10-1	0985-24-1111
鹿児島県	土木部監理課建設業指導係	〒890-8577 鹿児島市鴨池新町10-1	099-286-2111

(平成22年3月31日現在)

(注)①審査会は、建設業者を指導監督したり技術的な鑑定を行う機関ではありません。

②不動産の売買に関する紛争、専ら設計に関する紛争、工事に伴う近隣者との紛争、直接契約関係のない元請・孫請間の紛争などは取り扱うことができません。

建設業法の概要

建設業の許可を要するもの

許可制度

国土交通大臣許可
(2以上の都道府県に営業所を設置)

都道府県知事許可
(1の都道府県のみに営業所を設置)

28業種
(土木工事・建築工事等)

特定建設業許可
(3,000万円以上の下請契約を結ぶ工事)

一般建設業許可
(特定建設業以外)

許可の要件

経営業務管理責任者の設置
(許可を受けようとする建設業に關し5年以上経営業務の管理責任者としての経験を有する常勤役員等を置かなければならない)

営業所専任技術者の設置
(営業所ごとに、技術検定等の試験に合格した技術者を置かなければならない)

その他、財産的基礎を有していること等

500万円未満の建設工事

(建築一式工事については、1500万円未満又は150㎡未満の木造住宅工事)

建設業の許可を要しないもの

技術者制度

建設工事の適正な施工の確保

技術者の専任配置
(公共性のある施設若しくは工作物又は、多数の者が利用する施設若しくは工作物に関する工事を行う場合) 監理技術者資格者証の携帯義務及び監理技術者講習の受講義務あり。

監理技術者の設置
(3,000万円以上の下請契約を結ぶ工事)

主任技術者の設置
(全ての建設工事)

経営事項審査

経営に関する客観的事項の審査
(公共工事の入札に参加しようとする建設業者)

- ① 経営規模
- ② 経営状況
- ③ 技術力
- ④ その他

監督処分

法令遵守の実効性を確保するため
不適格な者に対する処分
(請負契約に關し不誠実な行為、一括下請負等)

※ 許可を有さない者に対しても処分可能

- ① 指示処分
- ② 営業停止処分
- ③ 許可取消処分
- ④ 罰則の適用

請負契約の適正化

公正な請負契約の締結義務
請負契約の書面締結義務等

- 請負契約の片務性の改善
- 下請負人保護の徹底

紛争の処理

建設工事紛争審査会
(建設工事の請負契約に關する紛争の処理のため、国土交通省及び都道府県に設置)

- ① あっせん
- ② 調停
- ③ 仲裁

建設業法上の用語のポイント



1. 建設業とは、**建設工事(28業種)の完成**を請け負う営業をいいます。

28業種＝土木一式、建築一式、大工、左官、とび・土工・コンクリート、石、屋根、電気、管、
 タイル・れんが・ブロック、鋼構造物、鉄筋、ほ装、しゆんせつ、板金、ガラス、塗装、防水、
 内装仕上、機械器具設置、熱絶縁、電気通信、造園、さく井、建具、水道施設、消防施設、清掃施設

2. **軽微な建設工事**のみ請け負うことを営業する者については、**建設業の許可を必要としない**ため、建設業法上は、

建設業者 = **建設業許可業者**
建設業を営む者 = **許可を受けている・許可を受けていないを問わず、
 全ての建設業を営む者**

との用語を使い分けています。

【軽微な建設工事】とは、工事一件の請負代金の額が

- 建築一式工事の場合⇒1,500万円に満たない工事又は延べ面積が150㎡に満たない木造住宅工事
- その他の建設工事の場合⇒500万円に満たない工事

3. 発注者・元請負人・下請負人について、建設業法では次のように定義され、通称や契約上の名称とは異なっています。

通称	発注者(施主)	元請業者	一次下請	二次下請	三次下請
建設業法上	発注者	元請負人	下請負人 元請負人	下請負人 元請負人	下請負人
契約上	注文者(甲)	請負人(乙) 注文者(甲)	請負人(乙) 注文者(甲)	請負人(乙) 注文者(甲)	請負人(乙)

4. **建設工事の請負契約**とは、報酬を得て、**建設工事(28業種)の完成**を目的として締結する契約をいいます。

資材購入、調査業務や運搬業務などその内容自体は、建設工事ではないので、建設工事の請負契約に該当しません。

5. **請負代金の額**とは、**消費税を含んだもの**をいいます。

(H13. 4. 3 国総建第97号「建設業許可事務ガイドラインについて」【その他】2.)

建設業法令遵守推進本部「駆け込みホットライン」

通報先

全国共通 TEL.  0570-018-240

受付時間 / 10:00～12:00 13:30～17:00(土日・祝祭日・閉庁日を除く)

FAX.  0570-018-241

ナビダイヤルの通話料は、発信者の負担となります。

E-mail :  kakekomi-hl@mlit.go.jp

「駆け込みホットライン」への通報の仕方

通報にあたっては、建設業法令遵守推進本部が連絡情報として取り上げ、立入検査・報告徴収するかどうかの判断ができる次の事項について、できる限り明らかに報告して頂くことが望まれます。

- ◆ 通報される方の氏名、住所
- ◆ 違反の疑いがある行為者の会社名、代表者名、所在地、建設業許可番号等
- ◆ 違反の疑いがある行為の具体的事実について次の事項
(ア) だれが、(イ) いつ、(ウ) どこで、(エ) いかなる方法で、(オ) 何をしたか 等
なお、違反の疑いがある行為を証明するような資料等があれば、通報後に建設業法令遵守推進本部に提出(郵送、FAX)してください。

1. 通報される方の情報

氏名		
住所		
電話番号		E-mail

2. 違反の疑いがある行為者の情報

会社名	
代表者名	
所在地	
建設業許可番号	
電話番号	
その他	

3. 違反の疑いがある行為(具体的事実)

(ア) だれが	
(イ) いつ	
(ウ) どこで	
(エ) いかなる方法で	
(オ) 何をしたか	
その他	

駆け込みホットライン

— 建設業法令違反通報窓口 —

- ◆ 「駆け込みホットライン」に電話をすると、各地方整備局等の「建設業法令遵守推進本部」につながります。
- ◆ 「駆け込みホットライン」に寄せられた情報のうち、法令違反の疑いがある建設業者には、必要に応じて立入検査等を実施し、違反行為があれば監督処分等により厳正に対応します。

なくそう違反、あったら通報!!

全国
共通

TEL.  0570-018-240
(イハン) (ツウホウ)

ナビダイヤルの通話料は発信者の負担となります。

受付時間 / 10:00～12:00 13:30～17:00
(土日・祝祭日・閉庁日を除く)

★法令違反情報を通報された方に不利益が生じないよう十分注意して情報を取り扱います。

国土交通省
建設業法令遵守推進本部

「駆け込みホットライン」で受け付ける法令違反情報

※「駆け込みホットライン」は、主に国土交通大臣許可業者を対象に以下の建設業に係る法令違反行為の情報(通報)を受け付けます。



元請業者と下請業者の請負契約上の法令違反

「建設業法令遵守ガイドライン」に掲載されている法令違反、または法令違反のおそれがある事例

※「建設業法令遵守ガイドライン」は国土交通省のホームページに掲載されています。

●見積条件の提示

- ・不明確な工事内容の提示等により下請負人に見積りを行わせた
- ・法令で定められた見積期間より短い期間で下請負人に見積りを行わせた

●当初契約

- ・下請 工事に対し、書面による契約を行わなかった
- ・工事着手後又は工事終了後に契約書面を相互に交付した

●追加・変更契約

- ・追加工事又は変更工事が発生したが、変更契約を行わなかった

●工期変更に伴う変更契約

- ・工期の変更に伴い下請 工事の費用が増加したが、書面による変更契約を行わなかった

●不当に低い請負代金/指価発注

- ・元請負人の一方的な強要による合理的な根拠もなく、下請負人の見積額や従来の取引価格を著しく下回る額で下請契約を締結した
- ・工事着手後又は工事終了後に下請負人の協議に応じることなく下請代金の額を一方的に決定し、その額で下請契約を締結した

●不当な使用資材等の購入強制

- ・下請契約締結後に、下請 工事を使用する資材・購入先等を指定した結果、下請負人が予定していた購入価格より高い価格で資材等を購入することとなった

●やり直し工事

- ・元請負人と下請負人の責任及び費用負担を明確にしないままやり直し工事を下請負人に行わせ、その費用を一方的に下請負人に負担させた

●赤払処理

- ・下請代金の支払の際、施工に伴い発生した建設廃棄物の処理費用、旅行振込手数料等を一方的に下請代金から差し引いた
- ・下請代金の支払の際、下請負人が使用した駐車場や宿舎使用料等を実額にかかった金額より過大に差し引いた

●工期

- ・下請負人の責めに帰すべき理由がないにもかかわらず、下請負人の工期が短縮されたことにより発生した増加費用を一方的に下請負人に負担させた
- ・元請負人の不十分な施工管理等により下請 工事の工期が不足した場合に、元請負人が下請負人との協議を行うことなく、他の下請負人と下請契約を締結した費用を一方的に下請負人に負担させた

●支払保留

- ・工事的物の検査、引渡しが終了後、下請負人に対し、長期間にわたり保留金として下請代金の一部を支払わない

●長期手形

- ・120日を超える割引困難な長期手形により下請代金を支払った



工事の施工現場に関する法令違反

- ・一括下請負が行われている
- ・工事現場に必要な専任の管理技術者等が設置されていない
- ・監理技術者等の名義貸しが行われている
- ・施工体制台帳・施工体系図が作成されていない
- ・無許可業者と500万円以上の下請契約を締結している
- ・元請の一般建設業者が、下請業者と総額3,000万円(建築一式4,500万円)以上の請負契約を締結している 等



虚偽の許可申請・経営事項審査申請による法令違反

- ・建設業の許可申請の際、虚偽の内容で建設業許可を取得している
- ・変更届の際、虚偽の内容を提出している
- ・経営事項審査申請の際、虚偽の内容で申請している
- ・虚偽の内容で得た経営事項審査の結果を公共工事の発注者に提出している 等



建設工事の業種区分

建設工事の種類 (建設業法別表)	建設業の業種 (建設業法別表)	建設工事の内容 昭和47年3月8日建設省 告示第350号 最終改正平成15年7月25日 国土交通省告示第1128号	建設工事の例示 平成13年国総建第97号 建設業許可事務ガイドライン 最終改正平成20年12月24日 国総建第258号
1 土木一式工事	土木工事業	総合的な企画、指導、調整のもとに土木工作物を建設する工事(補修、改造又は解体する工事を含む。以下同じ。)	
2 建築一式工事	建築工事業	総合的な企画、指導、調整のもとに建築物を建設する工事	
3 大工工事	大工工事業	木材の加工又は取付けにより工作物を築造し、又は工作物に木製設備を取付ける工事	大工工事、型枠工事、造作工事
4 左官工事	左官工事業	工作物に壁土、モルタル、漆くい、プラスター、繊維等をこて塗り、吹き付け、又ははり付ける工事	左官工事、モルタル工事、モルタル防水工事、吹付け工事、とぎ出し工事、洗い出し工事
5 とび・土工・コンクリート工事	とび・土工事業	①足場の組立て、機械器具・建設資材等の重量物の運搬配置、鉄骨等の組立て、工作物の解体等を行う工事 ②くい打ち、くい抜き及び場所打ぐいを行う工事 ③土砂等の掘削、盛上げ、締固め等を行う工事 ④コンクリートにより工作物を築造する工事 ⑤その他基礎的ないしは準備的工事	①とび工事、ひき工事、足場等仮設工事、重量物の揚重運搬配置工事、鉄骨組立て工事、コンクリートブロック据付け工事、工作物解体工事 ②くい工事、くい打ち工事、くい抜き工事、場所打ぐい工事 ③土工、掘削工事、根切り工事、発破工事、盛土工事 ④コンクリート工事、コンクリート打設工事、コンクリート圧送工事、プレストレストコンクリート工事 ⑤地すべり防止工事、地盤改良工事、ボーリンググラウト工事、土留め工事、仮締切り工事、吹付け工事、道路付属物設置工事、捨石工事、外構工事、はつり工事
6 石工事	石工事業	石材(石材に類似のコンクリートブロック及び擬石を含む。)の加工又は積方により工作物を築造し、又は工作物に石材を取付ける工事	石積み(張り)工事、コンクリートブロック積み(張り)工事
7 屋根工事	屋根工事業	瓦、スレート、金属薄板等により屋根をふく工事	屋根ふき工事
8 電気工事	電気工事業	発電設備、変電設備、送配電設備、構内電気設備等を設置する工事	発電設備工事、送配電線工事、引込線工事、変電設備工事、構内電気設備(非常用電気設備を含む。)工事、照明設備工事、電車線工事、信号設備工事、ネオン装置工事
9 管工事	管工事業	冷暖房、空調和、給排水、衛生等のための設備を設置し、又は金属製の管を使用して水、油、ガス、水蒸気等を送配するための設備を設置する工事	冷暖房設備工事、冷凍冷蔵設備工事、空調和設備工事、給排水・給湯設備工事、厨房設備工事、衛生設備工事、浄化槽工事、水洗便所設備工事、ガス配管工事、ダクト工事、管内更生工事
10 タイル・レンガ・ブロック工事	タイル・レンガ・ブロック工事業	れんが、コンクリートブロック等により工作物を築造し、又は工作物にれんが、コンクリートブロック、タイル等を取付け、又ははり付ける工事	コンクリートブロック積み(張り)工事、レンガ積み(張り)工事、タイル張り工事、築炉工事、石綿スレート張り工事
11 鋼構造物工事	鋼構造物工事業	形鋼、鋼板等の鋼材の加工又は組立により工作物を築造する工事	鉄骨工事、橋梁工事、鉄塔工事、石油・ガス等の貯蔵用タンク設置工事、屋外広告工事、閘門・水門等の門扉設置工事
12 鉄筋工事	鉄筋工事業	棒鋼等の鋼材を加工し、接合し、又は組立てる工事	鉄筋加工組立て工事、ガス圧接工事
13 ほ装工事	ほ装工事業	道路等の地盤面をアスファルト、コンクリート、砂、砂利、碎石等によりほ装する工事	アスファルトほ装工事、コンクリートほ装工事、ブロックほ装工事、路盤築造工事
14 しゅんせつ工事	しゅんせつ工事業	河川、港湾等の水底をしゅんせつする工事	しゅんせつ工事
15 板金工事	板金工事業	金属薄板等を加工して工作物に取付け、又は工作物に金属製の付属物を取付ける工事	板金加工取付け工事、建築板金工事

建設工事の種類 (建設業法別表)		建設業の業種 (建設業法別表)		建設工事の内容 昭和47年3月8日建設省 告示第350号 最終改正平成15年7月25日 国土交通省告示第1128号	建設工事の例示 平成13年国総建第97号 建設業許可事務ガイドライン 最終改正平成20年12月24日 国総建第258号
16	ガラス工事	ガラス工事	工業	工作物にガラスを加工して取付ける工事	ガラス加工取付け工事
17	塗装工事	塗装工事	工業	塗装、塗材等を工作物に吹付け、塗付け、又ははり付ける工事	塗装工事、溶射工事、ライニング工事、布張り仕上工事、鋼構造物塗装工事、路面標示工事
18	防水工事	防水工事	工業	アスファルト、モルタル、シーリング材等によって防水を行う工事	アスファルト防水工事、モルタル防水工事、シーリング工事、塗膜防水工事、シート防水工事、注入防水工事
19	内装仕上工事	内装工事	工業	木材、石膏ボード、吸音板、壁紙、たたみ、ビニール床タイル、カーペット、ふすま等を用いて建築物の内装仕上げを行う工事	インテリア工事、天井仕上工事、壁張り工事、内装間仕切り工事、床仕上工事、たたみ工事、ふすま工事、家具工事、防音工事
20	機械器具設置工事	機械器具設置工事	工業	機械器具の組立て等により工作物を建設し、又は工作物に機械器具を取付ける工事	プラント設備工事、運搬機器設置工事、内燃力発電設備工事、集塵機器設置工事、給排気機器設置工事、揚排水機器設備工事、ダム用仮設備工事、遊技施設設置工事、舞台装置設置工事、サイロ設置工事、立体駐車設備工事
21	熱絶縁工事	熱絶縁工事	工業	工作物又は工作物の設備を熱絶縁する工事	冷暖房設備、冷凍冷蔵設備、動力設備又は燃料工業、化学工業等の設備の熱絶縁工事
22	電気通信工事	電気通信工事	工業	有線電気通信設備、無線電気通信設備、放送機械設備、データ通信設備等の電気通信設備を設置する工事	電気通信線路設備工事、電気通信機械設置工事、放送機械設置工事、空中線設備工事、データ通信設備工事、情報制御設備工事、TV電波障害防除設備工事
23	造園工事	造園工事	工業	整地、樹木の植栽、景石のすえ付け等により庭園、公園、緑地等の苑地を築造し、道路、建築物の屋上等を緑化し、又は植生を復元する工事	植栽工事、地被工事、景石工事、地ごしらえ工事、公園設備工事、広場工事、園路工事、水景工事、屋上等緑化工事
24	さく井工事	さく井工事	工業	さく井機械等を用いてさく孔、さく井を行う工事又はこれらの工事に伴う揚水設備設置等を行う工事	さく井工事、観測井工事、還元井工事、温泉掘削工事、井戸築造工事、さく孔工事、石油掘削工事、天然ガス掘削工事、揚水設備工事
25	建具工事	建具工事	工業	工作物に木製又は金属製の建具等を取付ける工事	金属製建具取付け工事、サッシ取付け工事、金属製カーテンウォール取付け工事、シャッター取付け工事、自動ドア取付け工事、木製建具取付け工事、ふすま工事
26	水道施設工事	水道施設工事	工業	上水道、工業用水道等のための取水、浄水、配水等の施設を築造する工事又は公共下水道若しくは流域下水道の処理設備を設置する工事	取水施設工事、浄水施設工事、配水施設工事、下水処理設備工事
27	消防施設工事	消防施設工事	工業	火災警報設備、消火設備、避難設備若しくは消火活動に必要な設備を設置し、又は工作物に取付ける工事	屋内消火栓設置工事、スプリンクラー設置工事、水噴霧、泡、不燃性ガス、蒸発性液体又は粉末による消火設備工事、屋外消火栓設置工事、動力消防ポンプ設置工事、火災報知設備工事、漏電火災警報器設置工事、非常警報設備工事、金属製避難はしご、救助袋、緩降機、避難橋又は排煙設備の設置工事
28	清掃施設工事	清掃施設工事	工業	し尿処理施設又はごみ処理施設を設置する工事	ごみ処理施設工事、し尿処理施設工事

※ 28の建設工事の種類のうち、土木一式工事及び建築一式工事の2つの一式工事は、工事の実施工を想定している他の26の専門工事とは異なり、大規模又は施工内容が複雑な工事を、原則として元請業者の立場で総合的にマネジメントする事業者向けの許可です。